
トワイライト・ガーデン

貴水 玲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トワイライト・ガーデン

【Nコード】

N5769S

【作者名】

貴水 玲

【あらすじ】

見世物専用の人形娼婦のシェイラは、ある晩呼ばれた貴族の夜会で見知らぬ美青年に突然唇を奪われる。後日客として現れた青年アズフェルトはシェイラにある提案をするが、実は彼には人には言えない秘密があつて……！？華やかな都を舞台に、運命の恋の幕が上がる――

プロローグ（前書き）

久々の投稿で緊張です。

『ANGEROSA』の設定を一部借りて書いた作品です。
とにかく楽しんでいただけますように！
よろしくお願いします

プロローグ

「――よし」

口元を拭い、青年はガラスの小ビンのふたを閉めた。形のいい唇を引き締め、人気のない回廊から夜空を仰ぐ。

「……頼むから」

漆黒の空を切り裂いて、蜜色の満月が誇らしげに浮かんでいる。手を伸ばせば届いてしまいそうなくらい近く、大きく見えた。

「……頼むから、もってくれよ……」

金砂を散りばめたような淡い光が、青年の端整な面差しを暗がりに映し出す。

握りしめた小ビンを、青年は上着のポケットの中に落とした。深呼吸をして赤絨毯の上を歩き出す。

広間への扉が大きく開かれ、煌びやかな世界が目の前に現れる。音楽と笑い声に満ちたその海の中へ、青年はゆっくりと踏み出した。

人形娼婦

お集まりなる紳士淑女の皆様方

今宵お目にかけますはその昔、美しきガードルードの森で生まれた
ゆゆしき恋の物語――

透き通った声で口上を述べ、美しい二人の少女が広間の客に向かつて優雅に一礼した。

フリルやレースがふんだんに使われたエプロンドレスで着飾ったその姿は、まるで人形のように愛らしい。『生きる夢』と呼ばれる人形娼婦たちの可憐ながらも魅惑的な微笑みは、会場の男性客たちの目を釘づけにしていた。

「では皆さま、ごゆっくりご観劇くださいませ……」

役者たちが現れ、幕が開く。拍手と歓声の中でもう一度退座の挨拶をして、少女たちは舞台の後ろの深いドレープカーテンの向こうへ消えた。

「おつかれさま、姉さんたち！」

戻って来た麗しい娼婦たちを、裏の小部屋で待機していた赤いエプロンドレスの少女――シェイラは笑顔で迎えた。だが顔を合わせた途端、彼女たちはぐったりとうな垂れた。

「……ああつ！ もうホント疲れたつ。最悪！」

「あゝきつかったあゝ。もうくたくた、帰りた〜い！」

さきほどの気品漂う振る舞いはどこへやら。大口でため息をつき、小部屋の隅にある長椅子に両手足を投げ出すさまは、この上なくだらしない。

仕事上の先輩である少女たちの醜態に、シェイラは慌てて後ろ手にカーテンをしっかりと閉めた。

「ちよつと二人とも気抜きすぎ！ そんなところを伯爵に見られたら大変よ」

今夜呼ばれているこの屋敷の主人はコールリッジ伯爵。

このロザリアム公国の参事、つまり君主である大公の宰相を務める大貴族だ。ちらりと顔を見ただけだが、厳しそうな男だった。こんなところを見られて出張費を支払わないなんて言われたら困る。絶対に困るのだ。

「大丈夫よお、お芝居がおわるまでは。何だっけ、男好きな魔女とヘタレ騎士の恋物語？」

「妻と愛人の魔女が騎士を取り合う安っぽい愛憎劇じゃなかった？」
「……どっちも違うと思うけど」

楽隊が奏でる音楽が帳越しに聞こえてくる。

今宵、旅芸人たちが催す寸劇の題は『ガードルードの魔女』。伝説の騎士が人間の魂を食らう悪名高い魔女を倒す、という有名な昔話だ。

「羽振りがいいこと、貴族様は。あたしたち“人形娼婦”^{ドール}だけじゃなく、旅一座も招くなんて。ほんと遊び呆けるのがお好きね。バツカみたい」

黒ドレスの少女が起き上がり、シェイラの方を向いてべつと舌を出す。

背後のカーテンの向こうにあるのは、豪華なシャンデリアが燦然と輝く大広間。そこには大勢の着飾った老若男女が集まっている。彼らは皆、ロザリアムの貴族たちである。

リーン王国には属する四つの公国があり、大公と呼ばれる王族の血をひく四人の君主がそれぞれ治めている。公国は貴族の治める複数の「領」で形成されている。ロザリアム公国の貴族たちも普段は己の治める領地で暮らしているのだが、毎年議会の始まる四月になるとこの主都ヴィクトリアにやってくる。目的は国政への参加——のはずなのだが、議会の始まりは社交シーズンの開幕も意味する。彼らは大公の邸宅、サー・ハウスに近いセント・エリスに第二の屋敷を持っており、連日パーティーに明け暮れるのだ。

この時期には、リーン王国に属する他の三公国からも貴族たちが

国賓として招かれる。

ロザリアム元首のレーヴェン・ロザリアム大公爵は大の社交好きで、このシーズンには自らも盛大な宴を催す。主都ヴィクトリアは商業により発展したが、同時に社交地としても有名だった。そしてヴィクトリアに居を構える貴族たちも、国華のためにと己の持てる財力を総動員して豪華なパーティーを開く。そしてその余興として芝居をみせる旅の芸人や、シェイラたちのような人形娼婦^{ドール}と呼ばれる見せ物専用の娼婦を呼んで接客させるのが流行りだった。

「でもなんであたしたちが、給仕までしなきゃなんないの？ 人形娼婦^{ドール}は安娼婦とは違うのよ。一晚話をするだけで何千ルビーもする——高嶺の花なんだから」

青ドレスの少女が肘置きの上で不服そうに頬杖をついた。

人形娼婦の仕事は、豪華な衣装を着て天使のように微笑むこと。

名の通り観賞用の娼婦で、『外見の美しさ』で客を魅了する商売だ。でも最近は客が来るのを待つだけでは利益が上がらないと女主人が言い出し、貴族のパーティーへの出張営業が始まった。まだ人形娼婦になって一ヶ月のシェイラは他の娼婦たちのように接客はほとんど出来ないが、手伝いで連日上層街へ来ている。

だが傲慢な貴族たちのパーティーでは、客の機嫌をとれだの給仕しろだの召使い同然に扱われる。だからはっとするほど美しい少女たちの顔も、陰では不平不満に歪んでいた。

「あのごうつくババア、もうけしか興味ないのよ！ あたしらがこき使われようが過労死しようがどうでもいいんやっ。ああー腹たつわあ！」

「ちよつと、言葉！ 訛り《コツト》なんて広間の人間に聞かれたらいい笑い者よ」

黒ドレスの少女の注意に、青ドレスの少女があわわと口元を両手で押さえた。

“貴族の令嬢のような気品”が売りの少女たちのほとんどは、貧しい下町や田舎育ちの娘だ。仕込まれて作り上げた偽りの自分が、ふ

とした瞬間にはがれ落ちてしまう。シェイラもなんとか言葉は矯正したが、時々気を抜くと飛び出してしまいそうになる。

「でも私はこうして外に出られる方がいいな。ほら、珍しいものもいろいろ見られるし」

このままでは永遠に不満の止まらない二人を鎮めようと、シェイラは明るく言った。

娼館では主人の許可なく外には出られず、閉鎖的な生活を強いられる。都にやってきて間もないシェイラは、花街のある下層街クレ・マリアのこと満足に知らない。だから限られた時間でも外の世界に触れられるのは楽しかった。

「相変わらずたくましいわね、シェイラ。見た目だけは天使みたいにきれいなのに」

シェイラの、緩やかなウエーブを描く蜂蜜色の髪や透き通るような白い肌、大きな空色の瞳をじっと眺めて、黒ドレスの少女が残念そうにため息をついた。

「ほんと、黙ってれば男なんか簡単に手玉にとれそうなのに。でも、キレて客に紅茶を浴びせるわ、おかみと言い争いはするわ。それじやいつまでたっても満足にお客は取れないわよ、シェイラ・アルニ」

「うつ……そ、それは」

先日の初仕事での失敗を指摘され、シェイラは言葉を詰まらせた。「こ、紅茶は仕方なかったのっ！　だつて出そうとしたらお客がどさくさに紛れて触ろうとしたんだもの！　おかみさんとケンカしたのだつてちゃんと理由があつて……。も、もうしないわよ、早く一人前になって稼がないといけないんだからっ」

そう、頑張らないといけない。大切なものを取り戻すために——そのために前を向いて生きようと決めたのだ。

「だから今夜も姉さんたちの仕事ぶりをしっかり見学して——あ、そうだ！　二人とも甘いものがほしくない？」

ぐったりと寝そべったままの二人に、シェイラは切り出した。「

広間の隣の部屋に、おいしそうなお菓子がたくさんあるのを見つけたの」

「ほしい！」二人が同時に飛び起きた。

疲れがにじんでいた少女たちの面差しが、花が咲いたようにぱつと明るくなる。『生きる夢』と花街で噂の彼女たちも、本来は無邪気な普通の女の子なのだ。同じ境遇を生きる彼女たちは仲間であり、家族のようなもの。その喜ぶ顔を見るのがシェイラは好きだった。

「じゃあちよつと待ってて、こつそり持ってくるから」

今夜も長い。栄養補給は必要不可欠だ。

二人に目配せして、シェイラはそつと小部屋の外へ出た。

落し物

廊下に出て、シェイラは大広間の裏にある応接室へ向かった。

貴族のパーティーは主に談話を楽しむ場なので、食事は出されないことが多い。かわりに応接室にはお菓子や軽食が用意され、客たちは好きな時にそれを取りにいくのだ。

余興の間はみんな広間に出ているはず。召使たちもこの間ばかりは休憩を許されているはずだから、今が絶好のチャンスだ。

娯館ではお菓子など与えてはもらえない。客が口にするのを眺めているだけだ。そうでなくても高価な砂糖やクリームは下層の者に手が届く代物ではない。だからこうしてこっそりつまみ食いするのが、貴族のパーティーでの唯一の楽しみだった。

——見つからないうちに急ごう。

勝手にうるついているところを使用人たちに見つかるのは気まずい。密告したりはしないだろうが、軽蔑の目で見られるに決まっている。同じ下層階級の中でも花街の者は卑しいと蔑まれる存在なのだ。誰も好き好んで身を置いているわけではないのに、そこにいるというだけで差別されてしまう。

前後に気を配りながら小走りに急ぐ。だが角を曲ろうとしたところで、飛び出してきた人影と思い切りぶつかった。

「きゃっ！」

「うわっ……！」

衝撃によるめいたシェイラの腕を、ぶつかった相手が素早く掴んだ。

「すまない！ 大丈夫か？」

ひどく慌てた男の声。上を向けば、息を呑むほど整った青年の顔

が目飛び込んだ。

「すまない、急いでいて……けがはないか？」

二十歳くらいだろうか。黒髪に、吸い込まれそうな深い青の双眸。目で上等とわかる白の三つ揃いをきつちりと着こなしている。

はつと我に返って頷くと、青年は「よかった。それじゃあ」と落ち着かない様子で言い置いて、シェイラの横を通り抜けた。

——びつくりした……パーティのお客、よね。

装いや雰囲気からして、招待客の一人だろう。探し物なのか青年は足元をきよるきよる見回しながら遠ざかっていく。

——何してるんだろ……ま、いつか。

べつに気にする理由もない。気をとりなおしてさつと角を曲がり周囲に誰もいないのを確認すると、シェイラは応接室に忍び込んだ。だが中にはすでに先客がいた。

「あつ！」

お菓子が並ぶ中央のテーブルの向こうで、十歳くらいの少年がシェイラに驚いて飛び上がった。

素早く両手を後ろに隠す。だが慌てたせいで、持っていた大きなマフィンを取り落とした。

「あなた……どこから入ったの？」

転がってきたマフィンを拾い上げて、シェイラは少年を見た。

着古した服に、頭にはぺちゃんこのキャスケット。どう見ても伯爵家の子供ではない。

「お、おいら果物の配達にきたんだ。でもあんまりでさえお屋敷なんで見てみたくなって……」

もこもこ言い訳して、少年が気まずそうに下を向く。

下町特有の訛り。青果市場で働く子供だろう。シェイラは笑った。

「大丈夫よ、怒ったりしないから。私もね、どろぼうに来たの」

目配せしてマフィンを差し出す。少年がおずおずと視線を上げた。「ね、誰も来ないうちに一緒にもらっちゃおう」

大広間に通じる扉がしつかり閉まっているのを一瞥して、小声で

少年に囁く。目を輝かせ、少年が「うん！」と大きく頭をたてに振った。

クロスのかかったテーブルの上には、銀の器に盛られたサンドイッチやクリームたつぷりのケーキ、ビスケットなどが並んでいる。ナフキンを取り、シェイラはそこにビスケットやマフィンを包んで少年に渡した。

「はい。見つからないように帰るのよ。……ん？　ねえ、それなあに？」

少年の胸ポケットに入っているものにシェイラは目を留めた。

「さつき中庭の近くで拾ったんだ。きれいだから母ちゃんに持っていこうと思って」

少年が取り出したのはガラスで出来た小ビンだった。小さいが精巧な作りだ。中には琥珀色の液体が入っている。

「これ……お酒だわ」

ふたをとると、芳醇だがつんと鼻を刺す香りがした。かなり強い火酒に違いない。

「あら？　花の模様がある……紋章かな」

ビンのふたの部分に、小さな模様が彫られているのにシェイラは気づいた。

木蓮の花だ。それでふと思い出す。

確か貴族は象徴花というものを持ち、それを家紋にしている。招待客の持ち物に違いない。

落とし主は血眼になって探しているだろう。家紋入りの持ち物ならなおさら。

その時、さきほどぶつかった青年のことを思い出した。

そういえば彼は何かを探しているようだった。かなり焦っていた。もしかして――

「ねえ、きみ」

ビスケットをおいしそうに頬張る少年を、澄んだ空色の瞳でシェイラは覗き込んだ。

「これ私に譲ってくれない？」

最悪な出会い

「いないなあ……」

広大な中庭を見渡して、シェイラは呟いた。

夜の庭園は冬の名残を思わせるひんやりとした外気に包まれていた。

空には手が届きそうなほど巨大な満月。柔らかな光が、シェイラの佇む回廊を青白く染めている。

辺りに人気はなかった。広間の音楽や笑い声がかすかに聞こえてくる以外は、噴水が水を噴き上げる涼やかな音と夜風の囁きしか聞こえない。

少年に裏口の場所を教えて、シェイラは小ビンの落とし主探しを開始した。

少年が拾ったと言っていた中庭にいるのではと思って来てみたのだが、姿はない。やっぱり屋敷の中だろうか。

——別に……いいんだけどね。わざわざ探さなくても。

足を止め、手のひらのガラスピンをシェイラは見つめた。

貴族のことなんて、放っておくべきだ。届けたってきつと感謝はされない。むしろ盗んだと思われるかも。金持ち連中はいつだって横柄で高慢で、自分のことばかり。こうして関わるようになってから心底そう思う。きつと嫌な思いをするだけだ。

——それにあの人が本当に落としたかどうかともわからないし……。

もうすぐ劇も終盤だ。次に拍手が聞こえたらまた客たちのところへ戻らねばならない。遅れたら他の二人にも迷惑がかかってしまう。——でも……

ふう、と小さくシェイラは息をついた。

「このままっていうのも後味悪いのよね。……もう少しだけ探してみよう」

『何事も簡単にあきらめちゃだめ。いいことも悪いこともあなたの

大切な一部になるの』

亡くなった母の言葉を思い出す。そうだ、一度決めたのだから出来る限りやってみよう。

そう決めて屋敷の方へ方向転換する。だがそこへ、男が二人歩いてきた。

「おや、こんなところでどうしました？ お嬢さん」

広間にいた客だ。金の房飾りや羽のついたその派手で悪趣味ないでたちには見覚えがある。ヴィクトリアには二種類の貴族がいる。

領地と爵位を持つ正当な貴族と、商売で成功し富と地位を築いた、“都市貴族”と呼ばれる成金たちだ。彼らはその後者であろう。

彼らはロザリアムの財源を支える重要層だけに貴族層と繋がりが深い。だが悪質な商売をする者も多く評判はよくない。

絡まれると厄介だ。気付かれる前に去ろうと、俯きがちに礼をして通り過ぎそうとする。だが男の一人に行く手を遮られた。

「よかつたら我々と少しお話でも……ほお、これは美人だ」

シェイラの顔を覗き込んで、男が感嘆の声をもらした。

人形娼婦のお決まりであるレースのヘッドドレスと白いフリルのエプロンを外しているので、どこかの令嬢だと思ったのだろう。だが、もう一人の男がおや、と声を上げた。

「おや、どこかで見たような……ああ、伯爵が呼んだ人形娼婦じゃないか。そうだろう！」

とつさに俯きそのまま「……急いでいるので」と通り過ぎようとする。だが、肩を掴まれ振り向かされた。

「ああ——あの二人の後ろにいた……見覚えがあるぞ。へえ、さすが安宿の女とは違って品があるな。言われなきゃ売婦だなんて気付かないくらいだ」

“売婦”、その言葉が突き刺さる。何度言われても慣れることがない痛みだった。

「ここで何してる？ もしかして誰かと逢引か？ 楽しそうだな」
男たちに挟まれシェイラは小さく震えた。髪を触られ「やめて！」

と思わず叫ぶ。

「ははっ、なんだよ純情ぶって。娼婦だろ？ 金が欲しいのならあとでやるよ」

「何するのよ！ 離してっ！」

払いのけた手を掴まれ、回廊の外の暗がりへと引っ張られる。両足を踏ん張ってシェイラは抵抗した。

「——待てよ」

すぐそばで声が上がった。

ゴブレット型の噴水の向こう側から、男が一人歩いてくる。天空から降り注ぐ銀の光が映し出す、芸術品のような美貌。シェイラは目を瞠った。それはさっき廊下でぶつかった青年だった。

「悪いけどそれ、オレの女だから」

「はあ？」男の一人が怪訝な表情で前に出た。

「なんだよ、あんた」

「——聞こえなかったのか。それはオレのオンナ。その汚ねえ手をさっさとどける」

だるそうに髪を掻きあげながら、青年が男を見下ろす。紳士の象徴とされているクラヴァットはほどけ、襟元はだいぶ乱れている。

初め見た時のきっちりした印象とはだいぶ違い、どこか退廃的な雰囲気だった。

「なんだと？ 何様だよあんた——」

「お、おい！」

もう一人の男が怯えた様子で前に出た男の袖を引いた。

「やめろよ！ お前知らないのか、この方はシヴォーレン候の——」

「シヴォーレン………て、まさか………シ、シンクレア卿——！」

男の声色が一変した。シェイラから離れ、二人はおどおどと後ずさる。

「——失せろ」青年の静かな恫喝に男たちは飛び上がり、

「もも申し訳ありませんでした〜!!」

叫びながら、一目散に屋敷の方へ走り去った。

「あ、ありがとうございました。助けていただいて——」

青年に向かつてシェイラは頭を下げた。だがほつと緩んだ顔を上げた途端、目の前に大きな影が覆いかぶさってきた。

「へえ、美人。オレ好みだ」

魅惑的な美貌が間近。その顔を洗練された微笑みで包むと、青年はおもむろにシェイラの手を取り——口づけた。

「あつ、あああのっ！」突然の行動に驚いて、シェイラは慌てて手を引いた。

「さ、さきほど廊下でお会いしましたよね。角でぶつかって……。

あの時はごめんなさい。それで私、あなたを探していて」

「オレを？——へえ、そう」

甘い囁きが降りかかってくる。見つめられてときまぎしつつ、その時シェイラは彼の瞳が不思議な色をしているのに気がついた。

——金色……？

まるで空に浮かぶ満月のような。確か廊下でぶつかった時は青い目だったような気がする。月光が反射してそう見えるのだろうか。魅惑的な虹彩から目が離せなくなっていると、端正なその顔がさらに近付いてきた。

「オレが忘れられなかった？ 大人しそうな力オして、けっこう大胆なんだな。オレはそういうの嫌いじゃないけど」

「え、えーとあの……そうじゃなくて」

あまりの近さに直視できなくなって、シェイラは目を泳がせた。

——これって……口説かれてる？

出会ったばかりなのに、なんて軽薄なんだろう。

上層界の男たちにとって恋愛は狩りと同じ一種の遊戯。だから口説かれても絶対本気にしてはいけないと仲間の娼婦たちがよく言っている。

ときめいたら相手の思うつぼ。暇つぶしの遊び道具にされるだけ

だ。惑わされるものかと気を引き締めて、シェイラは営業用の笑顔を引っ張りだした。

「いやですわ、ご冗談を。私はこれを届けたくてあなたを探していたんです」

握っていた小ビンを突き出し、さりげなく距離をとる。それを見て、青年がかすかに目を見張った。

「ああ、君が拾ってくれたのか。ありがとう」

ひょいと指でつまみあげ、上着のポケットに落とす。その間にシェイラはさらに一歩下がった。

「いいえ。よかったですわ、お渡しできて。じゃあ私はこれで失礼します」

腰を落として優雅に一礼し、シェイラは踵を返した。さっさと逃げよう。仕事で媚を売るのはなんとか慣れてきたけれど、こういう状況は苦手だ。それに大広間の方から拍手が聞こえてくる。きつと舞台が終わったのだ、早く戻らなくては――

「待てよ」

だが回廊に上がりかけたところで、手首を掴まれた。

振り返ったシェイラの頬に青年の手が伸びてくる。後ろに下がるうとしたが柱に背が当たり、逃げ場をなくした。

「お礼もさせてくれないのか？ もう少しいいだろ」

「ちよ……あの！ 私お礼なんて別に」

いらない――そう言いかけた時、ぐいと腰を引き寄せられた。

彫刻のような美貌が迫る。魔性を宿した瞳が煌めいたのを見た瞬間、唇に温かく柔らかい感触が押し当てられた。

「……！？」

月影が溶け込んだ噴水の水が夜空にむかって大きく噴き上がる。その向こうで大きな金色の満月が煌々と輝いていた。

繁栄と退廃の都

ヴィクトリアは大公の居城や議邸のある中央区・ノールと、貴族らの邸宅がひしめく上層区、セント・エリス、活気あふれる商業区オーレーン、そして多くの人々の暮らす下層区・クレ・マリアに分かれている。

花街・ローザはオーレーンとクレ・マリアのちょうど境に位置する魅惑の繁華街だ。

夜の帳が降りる頃、路地にひしめく娼館の軒先に吊るされた薔薇を象ったランタンが、妖艶に揺らめき迷い込む者を誘い始める。

その誘路の最奥に、人形娼婦^{ドール}を囲う娼館がある。

彼女たちは客と交わることをしない、見せ物専用の娼婦である。

だが一時一緒に過ごすにも、莫大な財貨を支払わねばならない。だがそれでも、極上の美女たちと限られた時間を過ごし、破滅していく男たちは後を絶たないのだった……。

——サイアク。

鏡の中の自分にむかって、シェイラはため息を吐き出した。

「時忘れの館」では、数人の少女たちが夜用の支度を始めていた。もうすぐ花街の門が開く時刻になる。げっそりした顔で座っている場合ではないのだが。

「どうしたの、シェイラ・アルニー。いつもムダに張り切ってるのに、ため息なんてめずらしい」

隣で手鏡を片手に口紅をさしている少女が、ちゃんと首を傾げた。「うん、ちよつとね……」小さく笑ってシェイラはもう一度鏡をのぞきこんだ。

いらいらして寝付けなかったせいで、少し目が赤い。顔も腫れぼったい。“極上の美女”失格だ。女主人に見られたら「売り物にな

らないなら出ていけ！」と言われかねない。そうでなくとも言い合
いばかりしていて折り合いが悪いのに。

だが追い出されることだけは絶対にあってはならない。何もかも
終わってしまう。

亡くなつた両親がだまされて背負つた借金を抱えて、ハートラン
ドの小さな街から都へ来たのが一ヶ月前。評判の美人だつた母譲り
の容姿のおかげで安宿に売られずに済み、人形娼婦になつた。こん
な仕事でも今は手放すわけにはいかないのだ。

——あの男のせいよ。
リボンやレースが溢れるテーブルの上でシェイラは両手を握りし
めた。

——あいつが私に、キ、キスなんて——……
払つても消えない昨夜のいまわしい記憶。思い出すと怒りがふつ
ふつと沸き起こる。

油断した。まんまと策略にはまつた。お礼だと言ってあんな風に
不意打ちで——

「もう！！ 貴族の男なんて最低！」

同じ部屋にいた少女たちがびくつと体を震わせた。

「なによお大声だして。昨夜の伯爵邸のパーティから変よシェイラ。
ほら、お菓子を取りにいった後あたりから。結局何も持つてこない
しい」

昨晚一緒にいた青ドレスの少女が、クッションの海の中から眠た
げに起き上がった。

「な、なんでもない。ごめんなさい」

ウェーブを描く長い金髪を揺すり、シェイラはバラの香りつき
のおしろいをとった。

いけない、うっかり取り乱してしまった。勢いよくおしろいをはた
いてごまかす。

人形娼婦には規則があり、恋愛をしたり異性と触れ合うことは厳禁なのだ。たとえ己の意思でなくてもばれたら過酷な罰が与えられる。だから話すわけにはいかない。

——はあ……なんでこんなことに。

はじめてだったのに……！

だが気が滅入るのは禁忌を破ったからだだけではない。

殴ってしまったのだ、あの青年の頬を思い切り。

その後全力で逃げたが、まずいことをしたとシェイラは改めて気付いた。

相手は貴族。それもかなりの身分の。

彼は逃げた男たちになんとか卿と呼ばれていた。「卿」とは男爵以上の身分の貴族の尊称だ。田舎にいた時はよく知らなかったが、この娼館へ来てから一般常識的なことは色々叩き込まれてきた。人形娼婦を買う客はほとんどが貴族。だから彼らの伝統やしきたりから政治的役割まで、知る必要があるのだ。

幸いあの後大広間では見かけなかったが、このままでは済まないだろう。見つければ……きつと首が飛ぶ。

——天国のお父さん、お母さん、私ももうすぐそっちにいくかもしれません……。

両手を組み合わせ、シェイラはくすんと鼻を鳴らした。

「……貴族が最悪なんて、今に始まったことじゃないじゃない」

ふと、抑揚のない冷めた声音が部屋の隅からあがった。

壁にもたれて座っている少女が、水タバコのパイプを唇から離しふうーと煙を吐いた。

「みんな大公の犬よ。飼い主の命令に言いなりの。議会を開くふりをして贅沢三昧。あたしら雑草が重税や労働で苦しもうが見向きもしない……」

ひとすじの白い煙はゆるやかに伸びあがり、やがて天井で霧散した。

ロザリアムでは人々は上層階級と下層階級の二つに分けられる。

上層階級とは古くから大公家に仕える貴族と、他国との貿易や商業で財を築き地位を得た都市貴族を指す。そして下層階級は、いわゆる街や村で暮らす庶民や労働者のことである。

国政は貴族の中から選ばれた三人の参事が取り仕切っている。そして他の貴族たちは年に数ヶ月議官として法律改正やさまざまな決議を行う議会に参席する義務が課せられている。だが実際は形だけで、ほとんどの議官が参会せず社交に明け暮れていることは周知の事実だ。

「大金は落としてくれるけど、だーれも期待なんかしてない……得るだけの人間には、失うばかりの人間の気持ちはわからないのよ……ねえ、そうでしょ」

うつろな目で部屋の中を見回し、少女は薄く微笑んだ。
アンドレアは貴族を憎んでいる。

彼女はロザリアム北部のトレンカという雪深い街から来た。そこは悪質な貴族が治める土地で、年々引き上がる年貢が払えずこうして売られる娘が多いという。

「……アンドレア、もう少し控えたら？ 体に悪いわ」
テーブルを離れ、シェイラは再びパイプをくわえた少女のそばへ座った。

ハーブの香気を吸う水タバコは医療に使用されることもあるが、それでも過剰摂取すれば毒だ。シェイラと同じ十七歳であるアンドレアは、その中毒でだいぶやつれ生気のない顔をしている。

「いいのよ……あたし壊れたいんだから」

ふふ、とやけに赤く艶めかしい唇を歪め、アンドレアは影のように長く黒い巻き毛を指に絡めた。

人形娼婦たちの中には、生きるために現実を受け入れ気丈に生きる少女たちもいる。だが現実から逃れるためにつかの間の幻想に溺れる者も多くいた。

「なんてこと言うのよ」

絶望の中に漂う彼女たちを見るたび、シェイラはたまらなく悲し

くなる。自分だって望んでここに在るわけではない。だが希望は捨ててはいけなないと、必死に思っている。いつかこの場所を出て自由になれる日がくると……

「もしも……白馬の騎士様でも助けにきてくれたら」

天窓から差し込む夕日が陶器のように青白いアンドレアの顔に降り注ぐ。その光にこのまま連れ去られてしまいそうな気がして、シェイラは冷たいその手をぎゅっと握った。

「……なんて夢みても無駄よね。あたしたちはどこへいっても人形だもの」

遠くで鐘が鳴り始める。商業区オーレーンの中心部にある大聖堂の鐘の音だ。

豊穡の女神を称える鐘は、夜を迎える報せ。花街の扉が開く刻。憂いも、弱さも、涙も、本当の自分も忘れて夜の蝶たちが一斉に闇の中に舞う――

「アンドレア」ふらりと立ち上がった少女を引き留めようとシェイラは手を伸ばす。

「シェイラ！ いるかい？」

その時ドアが開き、館の女主人が現れた。

「お前に客だよ。さっさと用意しな」

怪しい客

——私に指名？

半信半疑でシェイラは女主人について部屋を出た。

言葉遣いや礼儀作法を叩き込まれる見習い期間を経て、人形娼婦^{ドール}は客の前に出る。まだ一ヶ月の新米娼婦のシェイラに決まった客はない。だから妙なことだった。

「あの、どうして私に？」

前に行く女主人の背中に問えば、愛想のない早口の答えが返ってきた。

「出来るだけ顔の知られてない子がいいってご希望なのさ。ここではお前が一番新しいからね。だから仕方なく呼んだんだよ」

——そういうことね……。

その説明で、シェイラはなるほど納得した。

「へんな男でねえ、部屋に入ってもフードをかぶったままうろうろ……きつと花街に入るのも初めてなんだろうよ。正直お前の態度や接客には不安がたつぷりあるが、適当な相手にはちょうどいいだろう」

——余計なお世話よ。

むっとしてシェイラは口を曲げた。

正直この女主人とはうまくいっていない。

拾われた恩はあるが、拝金主義者で少女たちを「道具」としか思っていない利己的な人間だ。正義感の強かった父親譲りの性格からシェイラはしばしばこの主人に反発し、煙たがられているところがある。つい先日もしと悶着あったばかりだった。

酔ってやってきた客が仲間の少女を連れ去ろうとし、彼女は男を突き飛ばして逃れた。正当防衛に違いないのに、女主人は少女を手酷く鞭で叩いたのだ。当然シェイラは食ってかかり口論になった。

もうけにならなそうな客をあてがうのは嫌がらせに違いない。

「でもいいかい」

廊下の一番奥にある客室の前で止まり、女主人が姿勢よく振り返った。

「客は客だからね。極上の愛想を振りまくんだよ。気に入られたら給金をあげてやるから」

——うそばかり。

そんな約束守ったためしがないくせに。

思わず顔をしかめそうになったが我慢して「はい、おかみさん」と素直に頷き、シェイラは部屋の中へ入った。

まるで貴族の館のように豪華な造りの部屋の中、客の男は窓辺に立っていた。

頭からすっぽりとグレーのフードを被っており、なんだかそわそわしている感じがした。傍から見たら、確かに怪しい。

「ようこそ、時忘れの館へ」

気にせずシェイラは臙脂色のドレスの裾をつまんでお辞儀をした。ビロードのソファセットの向こうでぎくりと身をすくめ、男が振り返る。フードが背中にはがれ落ち、その顔が露わになった。

「……ああつ！！」

その瞬間、シェイラは見事“極上の愛想”を取り落とした。

「あなた！ 昨夜の……！！」

——あの男！

呆然としたまま、シェイラは確かめるべく何度も瞬きを繰り返した。

黒い髪に青い瞳、芸術品のように非の打ちどころのない容姿——間違いない。目の前にいるのは昨晚シェイラの唇を奪った憎むべき相手だった。

「なんで！？ なんでこんなところにいるのよ！」

「……何の話だ？」

青年が眉をひそめる。それを見てシェイラははつと息をのんだ。
「もしかして……私を捕まえにきた、とか……？」

思わず後ずさる。だが青年は渋面のまま、首を傾げた。

「は？ 何のことだ？ ……君とは初対面だと思うんだが」

——は？

顔をしかめたのは今度はシェイラの方だった。

「まさか……覚えてないの？ あんなことしておいて？」

「何を言ってるんだ？」

「何を、ですって？」

愕然とする。ありえないそのとぼけっぷりにシェイラは青年に詰め寄った。

「とぼけないでよ！ ゆうべ伯爵邸の廊下でぶつかって、それから中庭で会ったでしょ！」

「ろ、廊下？」シェイラの勢いにたじろぎ——青年は紺色に近い瞳をはつと見開いた。

「ああ！ あれは君だったのか。すまない、急いでいたもので顔を覚えていなくて……でも中庭ってなんのことだ？」

「——はあ？ 都合の悪いことは忘れようっての？ このヘンタイッ！」

「へ、変態！？」氷水を浴びたように青年の顔が青ざめた。

「失敬な！ 俺はこれでも伝統ある家柄の出だ！ そんな風に呼ばれる筋合いは——」

「まだしらばづくれる気！？ 強引に迫ってきたくせに！ あのね、テキトーに遊ぶにはちょうどいいって思ったんでしょけど、私は純な乙女なのっ！ 恋とか結婚に憧れだってあるんだから！ それをあんな——」

目の縁にぶわつと涙が浮かび上がった。青年がぎよつとした顔になる。

「はじめてだったのに——っ！！」

シェイラはその場に泣き崩れた。

人形娼婦は夢を見せるのが商売。絶対に客の前で取り乱したり悪態をついてはいけないのだが、そんなことはもうどうでもよかった。「ええっ！？ ま、まさか」よろめいて、青年がソファの縁に手をついた。

「俺はまた……またやったのか……！？」

「またですって！？」大粒の雫をこぼしながら、シェイラは顔を上げた。

「いつもああして女を弄ぶわけっ！？ そうなのね！ だから貴族ってサイテー！ 殴ったこと悪いと思つてたけど撤回よ！！ むしろよくやった私つて感じだわっ！」

「……殴った？」

思い当たる節があつたのか、青年が右の頬を押さえた。

「でもあなたの一言で私は終わりなのよ！ ここを追い出されて……そうなたら全部おしまいよ！ 借金も返せず、行き場もなくし、のたれ死ぬんだわーっ！！」

「ちよ、ちよと待つて、落ち着いてくれ！」

わんわんと泣きじゃくるシェイラの前で青年が膝をついた。

「俺はとぼける気もないし、君をないがしろにするつもりもない！ ただその……昨夜のことは途中から覚えていないんだ。それで困つてた。でも君のおかげで何をしていたかわかった。そのことについてはありがとうと言いたい」

——ありがとう？

ぽんと肩を叩かれて、シェイラは思いきり首を傾げた。

どうしてお礼を言われなきゃならないのだろう。しかも命の恩人だともいうような、まじめくさった顔で。まったく意味がわからない。

それは青年自身についても同じだった。きりつと引き締まった表情も、育ちのよさをうかがわせる丁寧な口調も、昨晚キスされた時の軟派な雰囲気とは別人のようだ。でも姿形は紛れもなくこの男な

のだ。そう再確認して、シェイラの感情は再び爆発した。

「なあにがありがとうよっ！ それを言うならごめんなさいでしょう！？」 今時の貴族は謝り方も知らないわけ？ それとも私のような雑草には礼儀は必要ないって言いたいのか！？」

「心外だ！」 青年が切り返してくる。

「俺は貴族である前に騎士だ。階級で差別せずに平等に尽くす努力はしている！」

「あなたが騎士ですって？ ヘーえ、それが本当なら大変ね！ 高潔の象徴ともいえる騎士様が酔っ払っていたいけな少女に乱暴……」

「うわああああっ！」

青年がシェイラの口を手の平でふさいだ。

「酔ってない！ だんじて違う！ これには深い事情があつて——とつ、ともかく不埒な真似をしたなら、そのことは本当に申し訳ない——」

「言い訳なんてどうでもいいっ！」

押さえつける手を払いのけて立ちあがり、シェイラは青年に人差し指を突き付けた。

「あなたは私の人生を狂わせたのよ！」

怒りのせいで、話が大げさになっていることも自分が何をしていのかもわかっていなかった。ただ大事な青春のページが踏みにじられたのが悔しくて仕方なかったのだ。

「本当に悪いと思ってるなら誠意を見せてよ！ 騎士は国の、人々の守護者となる誓いを立てるんでしょう？ 私だつてあなたが守るべき国民の一人よ。だったらちゃんと——」

「——わかった、責任をとる」

まっすぐに頷いて、青年がすっと立ち上がった。

——は？

ぽかんとするシェイラの前で、青年は懷から取り出した袋の口を逆さまにした。

金色のきらめきが赤絨毯の上に流れ落ちる。見たこともないような大量の金貨だった。

「責任をとって、君を身請けしよう。そのかわり——君にはしばらく俺の婚約者のふりをしてほしい」

微笑みの罠

その部屋は昼間だというのに夕暮れのように暗かった。

窓という窓の分厚いカーテンはすべて下され、ろうそくの炎の影が時折大きく揺れる。

石膏像や甲冑、古びた家具や絵画が詰め込まれた物置部屋の中央にはテーブルがあり、黒いベールを被った少女が座っていた。

テーブルにはたくさんビンや、赤や黄色の液体の入ったガラスの容器がいくつも置かれている。その中の一つに少女は手にとったビンの中身を一滴垂らした。

「今度こそ……絶対うまくいくわ……ふふふ」

容器の中の液体の色が、赤から透明に変化する。それを見て、少女は赤い唇を満足そうに緩めた。

チチチチチ！

近くにある鳥籠の中で、一羽の黒い鳥が突然暴れ出した。

「——うるさい！」

椅子から立ちあがり、少女は鳥を睨みつけた。

ベールの下からのぞく黒い瞳が、血のような真紅に染まる。その直後、鳥はピツと一声鳴いて、鳥籠の底面に紙きれのように落下した。

動かなくなった小さな体を見て、少女はくすくすと笑う。その目は元の色に戻っていた。

「邪魔するモノは許さない……だってもうすぐなんだもの」

透明な液体を移した小さなビンを高々と掲げ、少女はくるくると回り出す。

ベールがはがれ落ち、黒いブルネットが揺れる。喪服のような黒いドレスの胸元では大きな赤いガーネットのブローチが鈍くきらめいていた。

「見ていらして……絶対に貴方の心を手に入れてみせるわ——ねえ、マラウク様」

美しい館

予想外の出来事から二日後、シェイラはヴィクトリアの郊外グロウ・ヒースにある屋敷の一室にいた。

足元にばらまかれた黄金に、シェイラは怒りも忘れて唖然とした。夢でも見ているのかと頬をつねってみたが、痛かった。

立ち尽くすシェイラを置いて青年は女主人のところへ行き、身請けにはいくら必要かと尋ねた。唖然としたのは主人も同じ、でもしつかりとえげつない金額を口にした。しかし青年は臆することなく「わかった」と一言告げ、その日は帰った。そして翌日、約束通りの額の金貨が届けられ、さらに次の日には迎えの馬車が来て……仲間の少女たちに別れを告げ、シェイラはわけもわからぬまま時忘れの館を出ることになったのだった。

——信じられない……。

天蓋つきの寝台の上に緋色のドレスの裾を広げて仰向けに寝転び、シェイラは大きなシャンデリアの下がる天井を見上げた。

馬車で案内されたのは、緑野にそびえる四階建ての白亜の豪邸だった。

磨き抜かれた大理石の玄関、シャンデリアの連なる広いホール……二階にあるこの部屋まで、青い毛氈の敷かれた廊下をいつたいいくつ渡り継いだだろうか。

この部屋だって、以前家族と住んでいた家ほどの大きさがある。しつらえられた調度品も装飾品も高級だと素人目にもすぐわかる。

——なんで……こんなことになったんだっけ。

呆気にとられている間に事が進み、今一つ実感がわかない。身請けされて、娼館の外に出たなんて。しかも買主は……とんでもない身分の人間だったのだ。

シヴォーレン侯爵、アズフェルト・デー・シンクレア。それが青年の名だ。侯爵といえば貴族の中でも最も高貴な存在——大貴族

である。

馬車の中でシェイラは迎えに来た老執事から青年のことを聞いた。シンクレア侯爵家はロザリアムの東方、景勝地として名高いシヴオーレンの領主で、代々大公家に仕える騎士を排出してきた武芸の名門。かつては帝国より、最高榮譽である『聖騎士』の称号を授与されたこともあるという。半年前当主が他界し、一人息子であるアズフェルトが爵位を継承した。彼自身も騎士であり、二十一歳という異例の若さで、最近騎士団の総長に就任したばかりらしい。

——騎士団で……あれよね。

主都ヴィクトリアを守護するリジオン騎士団——巷では“貴族の社交場”と呼ばれている貴族の子弟のたまり場。

ロザリアムが独立国となった三百年ほど前に、国の秩序と平和の守護者となるべく結成された。だが今はそんな大義も忘れ、外面重視のお飾り騎士団になり果てている。

上層界では騎士団への入団は通過儀礼的な慣習で、数年の懲役義務を果たせばよいことになっているという。つまりはたてまえの奉仕。治安警吏の任務など二の次で、御前試合などの華やかな行事ばかりに熱心という実状らしい。

執事の話によると、シンクレア家はリジオン騎士団の創立者であり、代々当主は総長を務めているという。大公の信頼も厚く、国政でも重用されてきたらしい。

——なんか、別世界の人よね……。

ふかふかの寝台から起き上がり、シェイラは大きな窓の前に立った。

窓の外には、色とりどりの花が咲く美しい造形庭園が広がっている。

当主のアズフェルトはこの屋敷に一人で住んでいるらしい。さらに領地であるシヴオーレンには、先祖代々受け継がれてきた領主館もあるという。

「ここに一人なんて、贅沢すぎじゃない？　大掃除なんか始めたら

一年はかかりそう」

住人でなく使用人の立場で考えてしまうのは貧乏人の性である。想像しただけで気が遠くなりそうになってシェイラは窓辺の藤椅子に座った。

「こんなお金持ちがなんでにせの婚約者が必要なわけ？ それにあの人なんか変だし……」

アズフェルトは本当に伯爵邸のことを覚えていないようなのだ。再会も偶然だという。でもあんな印象的な出来事を忘れるなんてよっぽど記憶力が悪いのか、やはりお酒の飲みすぎか——。酒癖が悪いのかと執事に訊いたが「まさか」と怪訝な顔をされた。

「でもなーんか、すつきりしないのよねえ……」

殴られた記憶がないのはありがたいことなのだが、もやもやする。今になってちよつと大げさだったかもしれないとシェイラは後悔していた。キスは許せないがこつちも引つ叩いたし。あんなに泣きわめくことはなかったかもしれない。

「やっぱり……謝っておこうかな」

彼はきつと罪悪感から身請けを申し出たのだ。とんでもない散財をさせてしまった。

「やっぱりよくないわ！ 侯爵に言おう」

こんなお詫びは望んでなかった。ただちゃんと謝ってくればそれでよかったのだ。殴ったなんて言えばまた娼館に戻されるかもしれないが、それも仕方ない。

よしと決意してシェイラは立ち上がった。だがその時、部屋の扉が大きく開かれた。

「わっ、ウソ、マジ!? 本当に連れてきたんだっ」

戸口に現われたのは、アズフェルトではなく別の青年だった。

眩しい白のロングコートの裾をなびかせ、何やら嬉しそうに近付いてくる。

「へえーかわいいじゃん。金髪に空色の目——女神ティアナの使い、大天使シリエルと同じだ。素材としては完璧だね！」

快活そうな若葉色の瞳に覗き込まれてシェイラは戸惑う。

優男、という言葉がぴったりの整った顔立ちの青年だった。日に透けると金にも見える薄い栗色の髪と瞳の色が相まって、春の景色のように柔らかい雰囲気を持っている。

白地に金刺繍が美しいコートの胸元には、薔薇を象った青銀の徽章が光っている。どこかで見覚えがある——と記憶を探ろうとしていると、青年が人好きのする笑顔で言った。

「きみ、フィーの連れてきた人形娼婦ドールだろう？」

シェイラの手を取り、青年が恭しく頭を下げる。身に馴染んだ端正な拳措だった。

「ようこそ、華麗で退屈な世界へ——歓迎するよ」

「ウィル——！」

そこへ、軍靴の音を響かせて飛び込んできたのはアズフェルトだった。

二人の騎士

「ひとの家に勝手にあがり込んで何してるんだ、お前はっ！」

後ろから青年の襟首を掴んでシェイラから引き離す。

「今日は定期警邏の監督のはずだろう。都の巡回すらまともに出来ない準騎士らの怠慢阻止のために見張っておけと言ったはずだが？」

副総長のお前がさぼってどうする！」

クラヴァットを引っ張られ、ウィルと呼ばれた青年が「いでででっ」と悲鳴を上げた。

——わかった。まったく同じ服装の二人を見てシェイラは思い出した。

純白のコートに、腰にはサーベル。これはリジオン騎士団の制服だ。以前どこかのパーティーで貴族の息子が見せびらかしていた。胸元の薔薇は“剣の花”と呼ばれる団章である。

「や、やめろ、首がしまる！　ただでさえきつく巻いてきゅうくつなんだからっ。君が軍装規程を見直したおかげだね！」

「それが本来の正装だ、文句を言われる筋合いはない。高潔を掲げる騎士がちゃらちゃら着飾る必要が？　我々の任務は民衆の安全と治安の維持で、くつろぐことじゃない。父が退任してから服務規程もだいぶ緩んで勤務姿勢も問題だらけだ。たるんだ連中の心の乱れを正すためにもまずは服装から改善しようと考えたんだが、何か間違ってるか？」

「……いえ、滅相もないです総長サマ」

「わかったらさっさと仕事に行け！　まったく」

アズフェルトがウィルの胸をドンと押す。そして啞然としているシェイラに気付いた。

「——すまない、騒がしくて。こいつのことは気にしないでくれ」

「ちょっと、そりゃないんじゃないの？」アズフェルトの腕を掴みミトが身を乗り出した。

「自己紹介くらいさせてよ。名乗りもせず立ち去るなんてご婦人に失礼だ」

そう言ってウィルは右手を左胸に当て、騎士の敬礼をした。

「さきほどは失礼いたしました。私はウィル・アルベイン。フィー……アズフェルトとは幼なじみで、騎士団では彼の副官を務めております。以後お見知りおきを」

先ほどとは打って変わった、改まった口調で姿勢を正す。それだけで、くだけた雰囲気は払拭され、印象がきりと引き締まる。

この人も騎士——ということは貴族だ。優雅な一礼に、シェイラもドレスの裾をつまみ、娼館で習った礼法通りに腰を落とした。

「シェイラ・アルニーと申します。……はじめまして」

毎日鏡を見て練習していたから、挨拶だけは自信がある。ウィルが「へえ」と呟いた。

「さすが噂の人形娼婦。磨けば立派な令嬢になりそうだ。見る目あるじゃんフィー！ くそマジメでつまないヤツだと思ってたけど。あ、これからよろしくね。シェイラって呼んでいい？」

再びもとの口調に戻りウィルが笑いかけてくる。貴族とは思えない気さくな雰囲気にもまれ思わず「はい、よろしく」と答えかけて、シェイラは我に返った。

「ええとそうじゃなくて……あの、シンクレア卿、私もう一度聞きたいことが」

気難しそうなアズフェルトの渋面が、「ああ」と解けた。

「君にやつてもらった仕事のことだな。それを説明に来たところだったんだ。初めに言った通り、君にはしばらく俺の婚約者のふりをしてほしい。だがただ隣にいればいいというわけじゃなく、あくまで本物に見えるように」

「……ほんもの？」

そうじゃなくて、と言おうとしたが、気になる言葉にシェイラは思わず聞き返す。

「つまり、貴族のご令嬢のようになれってこと。侯爵家当主の未来

の妻としてふさわしい女性にね。それで社交界の面々を騙すつてわけだ」

事情を知っているらしいウィルがアズフェルトのかわりに答える。もやもやしていたシェイラの頭が急に冴えた。

「き——貴族のお嬢様？　む、無理よ、そんなの！！」

頭が転がり落ちそうなほど激しくシェイラは首を横に振った。

出来るわけがない、貴族のふりだなんて。すぐにばれて恥をかくに決まっている。

「だって私は辺境って言っていいほどの片田舎で育った超平民で、一ヶ月前に都に来たばかりなの！　人形娼婦にもなったばかりで礼儀作法もまだまだだし、ぜったい無理です！」

「その辺は心配ない。優秀な家庭教師を手配してある。まずは付け焼刃でもそれなりに見られるようになればいい。俺もフォローはするしな」

アズフェルトがさらりと言う。危機感のない余裕に満ちた態度がやけに高慢に思えた。

「簡単に言わないでください！　やっぱりこの話はなかったことに

…… おかみさんに掛け合って、お金はお返しします！」

「それは出来ない相談だ」懐からアズフェルトが一枚の紙を取り出した。

「ここに館主とかわした『所持契約書』がある。君を買い取ったという証明書だ。つまり、俺は君の主人になったということだ。俺の許可なく君はここから出ることは出来ない」

「そんな」二つの署名が並ぶその書面を見て、シェイラは青ざめた。「どうして私！？　あなたと身分の釣り合う人に頼めばいいじゃない。人形娼婦なんか買うより確実に大勢を騙せるわ！」

「確かに、それはもつともなんだけどねえ」アズフェルトの肩に腕を置き、ウィルが苦笑する。

「実はこいつには魔女の呪いがかかっていてね。そのせいでご令嬢方は彼に近づけないのさ」

「おい、余計なことを言うな」肩の腕を鬱陶しそうに払いのけ、アズフェルトがウィルを睨んだ。

「なんだよ、本当のことだろ。だって君は、あの『ガードルードの魔女』を倒した騎士の末裔なんだから」

末裔？ おとぎ話の？ 何を言い出すのかと思ったら。

「……あの」二人の間でシェイラは小さく拳手をした。

「悪いけど、今は冗談を聞く気分じゃないの。ごまかさないでちゃんと説明して」

疲れる……なんだかすごく疲れる。礼儀だの言葉遣いだのは忘れて、シェイラはいつも通り会話することにした。

「私を身請けしたのは、この間の夜の罪悪感からなんでしょう？

誠意をみせると言ったから……。でもね、その、私はお金がほしかったわけじゃなくて」

とにかく謝ってしまおう。そうしてここを出よう。割り切ってシェイラは話を進めてしまおうとした。だがウィルに「ちょっと待って」と遮られた。

「アズフェルト、この間って『またやったらしい』って言ったの、この子だったの？ ……はっはー、わかった。それでお前、口封じしようとして出して連れてきたんだな！」

——口封じ？

ウィルの口から飛び出した物騒な言葉に、シェイラはとっさに口をつぐんだ。

今のは——どういう意味だろう。アズフェルトとばかりと視線がぶつかる。

気まずそうに目を逸らし、アズフェルトがコホンと咳払いする。

「確かに君を連れてきたのはそのことが関係している。……でも」

そして顔を上げた瞬間、清潔な白が似合う伶俐な美貌からためらいの色が消えた。

「とにかく、今は時間がないんだ。聞きたいことはあるだろうが従ってほしい。君には一週間後にある大公の晩餐会にオレと一緒に出

てもらわなければならない。それまでにこの世界の作法やしきたりをみっちり学んでもらう」

「一週間後！？　なによそれ、勝手に決めないで！」

「そのぶん報酬はきっちり払う。君が望むだけ。それにほとぼりが冷めたら君のことは自由にすると約束する。悪い条件じゃないと思うが？」

蒼空の欠片のような瞳に問われ、シェイラは言葉に詰まる。確かにそれは——おいしい話だった。

「そういうわけで、当面君はこの屋敷で暮らすことになる。この南の離れは自由に使ってくれていい。侍女も何人かつけるから、何かあれば遠慮なく言ってくれ。入用の物があればすぐに用意させる。とりあえず以上だ。仕事に戻るぞ、ウィル」

どうやら説明する気も話を聞く気もないらしい。

軍人的な物言いで告げると、返事も待たずにアズフェルトは踵を返した。

「はいよ、大将。……悪いね、無愛想で」

長身をかがめ、ウィルが小声で囁いてくる。

「でも見ちゃったんなら仕方ない。あの“呪い”はアズフェルトにとって重大な秘密なんだ。災難だけど、しばらく従っておいた方がいいよ。僕も様子を見にくるからさ」

意味深な言葉の羅列と甘い笑顔でつかの間シェイラを魅了し、またねと手を振ってウィルはアズフェルトの後を追っていった。

——なに……なんなの——？

呪いって？　口封じって？　いったい自分は何を見てしまったのだろう——

閉じられた扉を見つめ、呆然とシェイラは立ち尽くした。

試練のはじまり

翌日からシェイラにとって過酷な日々が幕を開けた。

アズフェルトの用意した家庭教師たちによる調教が始まったのである。

娼館で礼儀作法は学んでいたので、それほど苦ではないだろうと思っていたが甘かった。

話し方や挨拶は当然のこと、歩き方、食べ方、笑い方、首を傾げる角度にいたるまでみっちり指導され、朝から晩まで気が抜けない状態。四日目の朝にはへとへとだった。

「うっ、苦しい……もう少しゆるく出来ないの、これ……」

侍女二人がかりで締めつけられたコルセットの息苦しさ、シェイラは呻いた。

「我慢してください。我慢はおしやれの基本です」

ぐったりと椅子に座るシェイラの髪をとかしながら、侍女のサラが鏡越しにくすぐすと笑った。

「……冗談。これ以上きつくしたら、死ぬわ。これでダンスの練習なんて地獄よ……」

貴族の婦人たちはこんな状態で、いったいどうやって平静を装っているのだろう。

人形娼婦の衣装でもコルセットは必需品だったが、こんなに息が詰まるほど締めたりはしなかった。初めの日は悲鳴を上げたほどだが着付け係の二人の侍女には「こんなのは序の口ですよ」と笑われる始末。叫ぼうがもうがこうが完全無視で手加減してくれない。

「大丈夫！ お嬢様ならすぐに慣れて本物の貴婦人のようになれるですよ」

その中でサラだけが唯一きさくに接してくれる。今年十六歳になるという彼女は、いつもにこにこ愛想がよく明るい少女だ。

侍女たちはシェイラが花街から来たことも、にせの婚約者である

ことも知っている。だから皆世話は焼いてくれるが必要以上に関わろうとはしない。だがサラは違った。

「こんなにお人形みたいにきれいで、髪だって絹糸のようで……あたし断つ然応援してますから、頑張ってください！」

「そ、そうなの。ありがとう……」

——ニセモノなんだけどね……。

目を輝かせて力説するサラに、シェイラは苦笑した。

結局シェイラは婚約者役を引き受けることにした。いや正確には、仕事に行ったきりアズフェルトが戻らなかったためそうするしかなかったのだが。

「旦那様からの贈り物のドレスだってほら、こんなにお似合いで。うらやましいです」

梳き終わった髪からブラシを抜いて、サラがほうと息をつく。鏡に映った自分の姿をシェイラは見つめた。

今日のドレスは胸元にレースのリボンのあしらわれた空色。シェイラの瞳と同じで、陽射しのように明るい金の髪にもよく合う色だ。朝がくるたびに『旦那様』ことアズフェルトの指示で部屋に届けられるドレスは、どれも肌触りのいい最高級の絹で出来た、下層の人間にはとても手が出ない代物ばかりだ。

——もので釣ろうつてわけ？

確かに女の子なら誰だつてきれいなものは好きだ。こんな今まで見たこともないような上等で高価なドレスや宝石ならなおさら。

「……侯爵は今日もいないの？」

「はい。昨夜も遅くにお戻りで、今朝も早くからお出かけに。総長に就任されてからお忙しいようで、ここのことろずっと騎舎にこもりきりだそうです」

——昨日も一昨日もその前も、同じ答え。いい加減食傷気味だ。

お飾り騎士団の何が忙しいのか。逃げているに違いない。だがサラの見解は違っている。

「旦那様は大公様やロザリアムのために、騎士団をよくしようと頑

張っていらつしやるんです。とてもご立派ですわ。まだお若いですが……ご聡明で誠実で正義感に溢れる、素晴らしいご当主様だとわたしは思います。このお屋敷にお仕えしてまだ二年ですが、あたしたちのような下々の者にもとってもおやさしくて」

サラがふつくと柔らかそうな頬をほんのり赤く染めた。

——おやさしい？ 私にはだいたい横柄な口のきき方でしたけど？

ここ三日、アズフェルトの話題に触れるたび侍女たちは同じように彼を褒め称える。

大公様のお気に入りで、狩りや晩餐会には必ず招かれること。王国軍より誘いが来るほど有能な騎士であること。何かすると笑顔で必ず『ありがとう』と言ってくれること、などなど。そして最後は決まってサラのように頬を赤らめるのだ。

「……あれならさぞおモテになるんでしょうね。たいした美男子だもの」

「はい、それはもう！」

皮肉っぽく言ったつもりだったが、サラはその含意に気付かず元気に答えた。

「式典などで凱旋した後は、礼服にレースのハンカチーフが何枚も入っていたり、お手紙が山のように。でも旦那様はすべてお断りしているようで」

「……それは呪いのせいだとか？」

え？ と訊き返され、なんでもないとシェイラはその言葉を取り消した。

あんな冗談を真に受けるなんてどうかしてる。使用人たちはいつさいそんな話口にしないし、からかわれたに決まっている。いいや、それより問題なのは。

——私は本人と話がしたいのよ！

結局、その後アズフェルトとは一度も話が来ていないままだ。それなのに毎日ぎゅうぎゅうにウエストを締めあげられ、しごかれるのは納得できない。お金で買ったものならどう扱ってもいいと思

っているのかもしれないが、こつちだつて感情のある人間なのだ。

——引き受けたからにはちゃんとやるけど。

昔から一度始めた事はどんなことがあると最後までやりとげたい性分である。投げ出したりはしないが、でも働く分はきっちり報酬をもらわなくては。

望む額を与えると、アズフェルトはそう言った。それが本当なら借金が返せる。シェイラはこれを絶好のチャンスととらえることにした。だからその約束がきちんと履行されるよう、きっちりとは話をつけたい。

——完璧にこなして、あつと言わせてやるわよ。

誰もが納得する貴婦人になって、アズフェルトを見返してやる。

サラが用意してくれた紅茶をシェイラはぐいっと飲み干した。

「あ……おいしい」

まろやかな味わいと鼻を抜けた優雅な花の香りに思わず声を漏らす。

「本当ですか？ よかった。そのお茶はシヴォーレンの特産なんですよ。先日領主館にある工房から届いたんです。今年はとても出来がいいそうで、旦那様もお喜びです」

シヴォーレンは薔薇の産地として有名で、香水や紅茶などの生産が盛んだ。領主であるシンクレア家はいくつもの工房や農園を持っているのだと執事が言っていた。

「領主館つて、侯爵の本邸よね？」

「ええ、そうです。お屋敷には工房があつて、年に三回ある出荷前にはご当主様が品質の確認をなさいます。大公様にはもちろん、ロザリアムの名産として国王陛下にも献上される品ですから。ですがご当主様はご公務で都に留まることが多いので、普段は大奥様が管理を」

「大奥様？」

「旦那様のお母上です。お身体が弱く、長くシヴォーレンでご療養を。幼い頃に旦那様は先代様とグロウ・ヒースに移られ、ずっと離

れて暮らしていらつしやいます。シヴオーレンはとても素晴らしいところなんですよ。年に何度か手伝いで行くんですが、時期になるとどこもかしこも薔薇の香りに包まれて……。ガードルードの森やミレン湖など自然の美しさにもいつも感動します。それに豊穡の女神ティアナにまつわる伝説もあるんですよ。黄金色に染まった広葉樹の森と青く澄んだ湖から、女神は大天使シリエル様をおつくりになったとか。シリエル様が生まれたとされる湖のほとりには古い聖殿もあります」

リン王国では豊穡の女神ティアナの信仰が盛んだが、厳しい宗教規制はない。地方によっては女神の使いである大天使を崇拜するところも多く、各地に礼拝堂や聖殿がある。

「それにシヴオーレンの本邸は夢のように美しいんですよ。——はい、できた！」

鏡に映るシェイラを見て、サラが満足げに頷いた。

「では、今日もお嬢様修行頑張ってください！ 今日のダンス講師は特別ゲストですから！」

それを聞いてがっくりとシェイラは肩を落とした。

Shall we dance?

「うまい、うまい。その調子」

壁一面がガラス張りになった明るい広間を、優雅なワルツの音楽が満ちている。

幾何学模様を描く寄せ木の床を、ウィルの足が軽やかに滑っていく。何度も繰り返されるその動きをシェイラはぎこちなく、必死に追いかける。だが同じところでまたつまずいて、ウィルの軍靴の先を思い切り踏みつけた。

「あつまた……！ ご、ごめんなさい！」

バイオリンの音色が止まる。ウィルが白い歯をのぞかせた。

「平気、平気。気にしないでいいよ。こういうのは慣れだから。ゆつくりでいいから僕に合せて。バランスをくずしても手を放したりしないから」

「は、はい」

一度足を止め、言葉通り丁寧にゆつくりウィルがステップを踏み出す。また足を踏まないように心掛けながら、シェイラは再びつま先に集中力を送った。

よろけそうになったが腰に回されたウィルの腕に助けられ、今度はターンがうまくいった。うれしくなつて、シェイラの口元が自然とほころぶ。

「あ、笑った。かわいいなあ。それ、本番でも忘れずにね」

息が降りかかるほどの距離で、ウィルの薄緑色の双眸が微笑む。急に恥ずかしくなり、シェイラは視線を下げた。

さすが貴族の一員だけあって、『特別講師』のウィルのリードは完璧だった。同じステップを繰り返し、シェイラが覚えたら次へ。間違えても立て直し、タイミングを揃えてくれる。開始からまだそれほど時間はたっていないが、すでにシェイラはこつを掴み始めていた。

「シェイラ、君筋がいいよ。これなら明日は教えにこななくてもよさそうだなあ。……ちよつと残念だ。もつと君の笑顔を一人占めしたいのに」

「わっ」

耳たぶに触れた吐息に、シェイラの集中力が切れた。がくつと膝が折れたところをウィルに支えられる。

「あの副総長様？ 真剣にやってるんだからふざけないでください！」

「ウィルでいいよ。何が？ 僕は真実を口にしたまでだよ。真っ赤になった君もかわいいね」

齒の浮くようなセリフにシェイラの顔が上気する。

さつきから何度、この羽が生えたように軽いふわふわとした言葉に惑わされただろう。

今まで父以外の男性と親しくつきあう機会のなかったシェイラにとって、この愛想の良さは反則だ。からかわれているとわかっていても、不用意にどきどきしてしまう。

「……そうやって、いったい何人のご婦人を口説いてきたんです？ 子爵家のお坊ちゃま」

社交界ではアズフェルトと人気を二分するという口説き魔をシェイラは出来る限り睨みつけてやる。

「やだなあ、今は君だけを見ているのに他のご婦人のことなんて。子爵家の息子といったって僕は次男だからね。兄がいる限り家督を継ぐことはないし、自由人なのさ」

「私なんか構っているより、お仕事に行かれたら？ また侯爵様に叱られますよ」

抱き寄せようとするウィルの胸を押し返し、シェイラは上着の胸にある薔薇の徽章を指さした。

彼が着ている真っ白なロングコートは、見習いである従騎士や準騎士は着られない、数少ない正騎士だけに許された正装だ。腰に下げているサーベルの柄には、アルベイン子爵家の家紋であるアイリ

スの意匠が施されている。

「今日はいいんだよ。ダンスの講師が足を怪我したっていうんで僕が代理を仰せつかったんだから。よし、ちょっと休憩にしようか。ちよつとお茶の時間だ」

柱時計がボンと鳴ったのと同時に、ティーセットを抱えた召使いたちが現れた。テラスへ出る窓辺のテーブルに真つ白なクロスを広げ、手際よくお茶の準備をしていく。

ウィルにエスコートされ、心地の良い陽だまりの中にシェイラは座った。紅茶の注がれたティーカップが置かれ、それに続いて次々とケーキやお菓子が運ばれてきた。

「あの……こんなに食べるんですか？」

クリームののったマフィンにドライフルーツのケーキ、タルトにブディング……ただならぬ量にシェイラは身構えた。あと二刻もすれば昼食になるというのに、これはかなり重い休憩だ。

「この家に来るとこれが楽しみなんだ。毎日レイトンパークにある人気の菓子店から、職人を出張させて作らせてるんだよ。僕のオススメはこのホロヴァ」

おいしいよ、と差し出されたジャムがたっぷりケーキをシェイラは受け取る。

ホロヴァとは、柑橘系の果実酒をたっぷり染み込ませた甘い焼き菓子だ。その上にアプリコットやレモンのジャムをたっぷりかけて食べる。以前貴族のパーティーでつまみ食いしたことがあるが、お酒の味と匂いが強くてシェイラは苦手だった。

「……侯爵って甘党なんですか？」

「あ、いいよ敬語は。気楽に喋って。うん、もう食事がわりだよ。特に最近の書類の決裁ばかりでイライラしてるみたいで、毎日ホロヴァを山ほど届けさせてる。今日は僕がお届け役。来たついでだしね」

おいしそうにホロヴァを頬張りながらウィルが言う。確かに昨日も一昨日もお茶や食事時には一緒にお菓子を出された。でもまさか

アズフェルトの好物だったとは思わなかった。

「……でもこんなに甘いものばかり食べるなんて体に悪いわ。少し控えた方が」

「うーん……それは君も同じかもよ？ 砂糖入れすぎじゃない？」

ウィルの指摘に、シェイラははっとして自分の手元を見た。

「ご、ごめんなさい、つい」

三杯目をすくうのをやめてポットのふたを閉め、シェイラははにかんだ。

「あはは、君も好きなんじゃない。意外だな、もっと大人っぽいかなと思った」

くすくすと笑うウィルの一言がぐさりと突き刺さる。

「よく言われるわ。……見かけ倒しだって」

「違うよ、悪い意味じゃなくて。まあ確かに話に聞く人形娼婦^{ドール}とは印象がだいぶ違うけど、意外性は大事さ。ここでは型通りに生きる人間が多いからねえ」

否定されなかったのが意外でシェイラは目を見張る。なんだかまたどきどきしそうだ。それに、とウィルの形のいい唇が付け加える。「フィーの相手をつとめるなら、どこにでもいるお嬢様じゃダメだ。あの“魔女”とその取り巻きたちに勝つ何かがないと——ね」

「……魔女？ それってこの間言っていた？」

ガードルードの魔女？ まさか実は今も存在しているとでも言うのだろうか。

「違うよ、昔話の魔女じゃない。でも同じくらい厄介かもね。——君も気をつけて」

ウィルが意味深な笑みを浮かべる。急に嫌な予感がしてきた。

「今度の晩餐会で会えるよ、記念すべき君の社交界デビューの時にね。ああ、楽しみだ。よし、それまでに完璧にしないとね！ では、もう一度お相手願えますか？」

やわらかな日差しのような笑顔で、ウィルはシェイラに手を差し出した。

開門？

ヴィクトリアに夜の気配が迫る。

豊穡の女神ティアナを奉る大聖堂の鐘の音が今日の終わりを告げれば、街灯の明かりが波紋のように広がり、都は昼から夜の顔へと変化していく。クレ・マリアでは花街の灯が色づき、セント・エリスでは窓明かりが灯る——今宵も華麗なる夜会の始まりだ。

「——緊張してるのか？」

走る馬車の中でアズフェルトが訊いてくる。膝の上で握りしめた両手はそのままに、シェイラはげっそりと顔を上げた。

「……おかげさまで。今にも吐きそうよ」

アズフェルトの整った眉がかすかに歪む。薔薇色の口紅をひいた唇を曲げてシェイラはふんと顔を逸らした。

過酷な教練期間を終え、大公主催の舞踏会の夜がやってきた。

今日は昼過ぎから目の回る忙しさだった。礼儀作法やダンスの最終確認、着替えに化粧にと引きずり回され……気づいたら出発の間。しかも侍女たちがいつも以上に気合いを入れてコルセットを締めてくれたおかげと緊張で、胃がキリキリしっぱなしだった。

「別に難しいことはないよ。君は俺の隣で微笑んで、適当に相槌を打ってくればいい」

白い手袋をはめながらアズフェルトが軽い調子で言う。上等な白の三つ揃いが嫌味なほど似合う完璧な居姿を、シェイラは横目に映した。

大公主催の夜会では、招待客たちは白を着る決まりがあるそうだ。色を身に着けていいのは大公一家だけ。これは大公に対する『変わらぬ忠誠心』を意味するらしく、守らぬと不実の臣として罰せられるのだという。シェイラも今夜は腰にサテンのリボンのついた純白

のドレスと白い長手袋をしている。

「簡単に言わないで。笑うのだって難しいの。歯を見せるとか声をたてるとか、唇の開き具合にも決まりがあるのよ。今日は鏡を見られないから、どうなるかわからない」

とげとげしく言い返し目が合う寸前で視線をはずす。アズフェルトが息をついた。

「……ずいぶんつかかるな。怒ってるのか？」

「当たり前でしょ！」

反らしていた首をシェイラはもとの位置に振り戻した。涙型の真珠の耳飾りが揺れる。

みるみるうちに全身に血の気が戻ってくるのを感じた。

「人に大変なことを頼んでおいて、一度も顔を見せないってというのはどういことよ。言いたいことだって山ほどあったのに！」

結局アズフェルトとはこの一週間、今日まで一度も顔を合せなかった。

どんなに遅くてもいいから取り次いでくれと、ずっと待っていたのに。

「……それについては申し訳なかった。でも仕事を立て込んで休む暇もなく——」

「だからって無責任よ！ 仮にも婚約者になれっていうのにほったらかしなんて」

ふんぞり返るようにシェイラは両腕を組んだ。

「でもそうよね、私は卑しい花街の女だもの。あなたにとってはどうでもいい存在よね！」

「……いや、そんな風には思っていないが」

「うそ！ 絶対思ってる。この一週間私がどれだけ大変だったか……！ それも知らずに黙って笑えですって？ 悪いけど、私はそんなに聞き分けよくありませんから！」

強気に言い放ちきつと睨みつける。アズフェルトが面食らった顔になる。

「……気が強いな。上層界のご婦人方は男に向かってそんな風に言い返したりしないぞ」

「当たり前でしょ、私はお嬢様じゃないんだから！ 批難したいならすればいいわ」

むうと口をへの字に曲げると、アズフェルトが吹き出した。

開門？

「いや、ただ変わつてると言いたただけだ。普通、相手が侯爵と知っていたらそんな口のきき方はしないだろう。不敬罪で一生牢獄暮らしになる可能性だってあるんだから」

「……何よ、脅し？ 私から見ればあなたたち貴族の方が変よ。当たり前になっている生活やパーティーだって、下層の人間にとっては考えられないことだもの。時間の浪費と無駄遣いが好きななんて十分変わってる」

今回のことだって。娼館から娼婦を買って婚約者に仕立て上げるなんて普通に考えたらありえない。大金を積んでまでやろうと思うことではないはずだ。

「君みたいな率直な女性は初めてだ」

よほどおかしいのか、肩を震わせてアズフェルトは笑っている。

ああ、まただ。

きっとこの人も思っているに違いない。見た目ほど中身はよくないって。

「……ウィル様にも言われたわ。そんな珍獣を見るような目で見ないで」

自分の意見を率直に言うことがどうしていけないのか。罰や糾弾を恐れていたなら正しいことは出来ないと父は言っていた。時には勇気を出して困難を乗り越えることも必要だと。

農作物を買い上げる成金商人たちの横暴に誰も異議を唱えられなっていた時も、父は一人でも立ち向かった。命知らずだと蔑む人もいたが、シェイラは真摯な父の生き方を誇らしく思った。だから自分も真っ直ぐに生きようと決めていた。でもそんな心がけを受け入れられることは、実際少ない。

「珍獣か……！ ははっ、そうかもしれないな」

「……笑えばいいわよ。だから無理だっていったのよ、私なんか」

「こんな」

文句ない着心地の高級な絹のドレスの裾をつまみ、シェイラは小さく息をついた。

「でも、引き受けた仕事はきっちりやるから。だからちゃんと報酬は払ってよね！　だましたりしたら許さないんだから！」

今後の人生はすべてその報酬にかかっている。それと引き換えにできるなら、完璧にこなしてやる——そのことだけを目標に、今日まで頑張ったのだ。

「ああ、わかつてるよ」口元の笑みはそのままにアズフェルトが頷いた。

「今夜は大公主催といっても、毎年恒例の顔見せの舞踏会だ。会話を楽しみダンスをするだけの気楽な集まりだから。多少は騒がれるかもしれないが……“肩書”は覚えたな」

もちろん、とシェイラは頷いた。

肩書とは社交界で披露するためにアズフェルトが用意した、シェイラの偽りの身分だ。覚えるまでスミッティに復讐させられ、今や頭の中からすぐに取り出せる状態だ。

「でもあなたのことを訊かれたら？　私はあなたをほとんど知らない。まあ、それはそっちも同じだと思うけど」

なんせこうして話すのは、あの最悪な夜も含めて四度目。だがまともな会話は今日が初めてかもしれない。

「君のことは知っているよ。この一週間でいろいろ調べさせてもらった。でもオレが語らなくてはならないのは架空の君についてだから、特に問題はない」

「ちよつと待って……私のこと調べたの！？」

驚いて身を乗り出すと、こともなげにアズフェルトは「ああ」と頷いた。

「オレは君の主人だ。素姓を調べるのは当然だろう。辺境ハートランドの牧場で育ち、両親の残した借金返済のために都に来了。別にばれて困ることはないだろう。田舎者だろうが貧乏だろうが俺は気

にしないし、誰に漏らすわけでもない」

「悪かったわね田舎育ちの貧乏人で！ でも好きでやってるんじゃないんだからっ」

きれいに化粧を施された顔が熱くなる。否定できない事実だけど、改めて言われると悔しくて恥ずかしい。でもアズフェルトにはそんな気持ちはわかりっこないだろう。

「わかってる。とにかく心配しなくていい。今夜はミトもいるしなあいつは外部でこのことを知る唯一の人間だ。社交場での対応は手慣れてるから心配ない」

「……あ、そう。ウィル様が来るならすつごく安心だわ！」

わざとらしく大げさに言う。アズフェルトが形のいい眉をひそめた。

「……あいつ、毎日屋敷に来てたって？」

「ええ、誰かと違って私を心配してくれてね！ おかげでダンスも出来るようになったし色々教えてくれた。優しいし素敵だし、ウィル様がいれば心強いわ」

「やめておけ」

アズフェルトの声のトーンが急に下がった。

「ウィルはだめだ。絶対に好きになるなよ。君には合わない」

「……は？ わ、わかってるわよ！」低い美声にどきりとしたがすぐに苛立ちが追い抜いた。

「身分違いだっていうんでしょ！ 安心してよ、そんなつもりはないからっ。余計なお世話です！」

「そうか。ならいい」

怒り心頭のシェイラからそっけなく目をそらし、アズフェルトは窓の帳を開けた。

——合わない、ですって？ そんな言い方しなくてもいいじゃない！ちゃんと立場はわきまえてる。確かにミトは魅力的だけど……。むかむかする気持ちを抑えてシェイラも外を見た。

商業区オーレーンの中心街、美しい天使の石膏像の並ぶ大聖堂前

の大通りを抜けて、馬車は上層区の門をくぐった。

この先にはヴィクトリアを見下ろす高台へ続くもう一つの門がある。今夜の目的地はその丘に聳える大公の住む城、サー・ハウス。限られた者しか足を踏み入れることを許されない聖域だ。近付くにつれ、馬車の明かりらしき小さな光がその門に向って点々と連なっているのが見える。今夜はあいにくの曇り空で月も星も見えないが、その様子はさながら地上の星河のようだ。

「——もうすぐだな。そろそろ準備を」

横に置かれた蓋つきの箱の中から、アズフェルトがレース地の白いベールを取り出した。

上層界では、初めて社交場に出る女性はベールで顔を隠して登場する習慣がある。内心ぎすぎすしていたがこれも仕事。気を取り直してシェイラは頭をかがめた。

「それと、これからは名前で呼んでくれ。仮にも婚約者なんだからな」

「名前って……ええと“フィー”？」

「……その気の抜けた呼び名はやめてくれ。許可もなしにウィルが勝手につけて迷惑してる。アズフェルトと」

「ふうん……そうなの。わかったわ」

——猫みたいでかわいいのに。

そう思ったが言うにとらまれそうなので、シェイラは我慢した。

「……何だ、じろじろ見るな。いよいよここから本番だ。頼むぞ、失敗は許されない」

シェイラの頭の上で、アズフェルトがふわりとベールを広げた。

「——わかってるわよ」

聖域へ誘う巨大な門をゆっくりと馬車が通り抜けていく。

純白のベールが舞い降りてくる瞬間、不本意だけど、結婚の儀式みたいだとシェイラは思った。

幕が開く

扉を抜けた途端、華やかな音楽と喧騒に抱かれた。

巨大なシャンデリアが輝く大広間内は人で溢れ返っていた。グラスを重ねる音、笑い声、ざわめきさえもどこか高貴な響きに聞こえる。優雅な音楽に合わせてパラソルのように翻る貴婦人達の白いドレスの裾が、まるで幻想のようにシェイラの目に映った。

「シヴォーレン候、アズフェルト・デイー・シンクレア様ご到着にございます」

大きく放たれた従者の声に、音楽がぴたりと止んだ。

アズフェルトの前で人波がさつと左右に分かれた。人々が一斉に跪き、表敬の一礼で迎える。

——これの……どこが気楽な集まり？

開かれた道をアズフェルトは進んでいく。場の雰囲気は圧倒され、思わず足が竦む。だが気を引き締め、シェイラは思い切って足を踏み出した。

顎を引き、背筋を伸ばす。足取りは羽毛が舞うように軽やかに。

人々の視線が自分に注がれているのをベール越しに感じる。ぴりぴりとした緊張感に煽られながら一歩、一歩進めていくと、緋毛氈の敷かれた大階段の前でアズフェルトは止まった。

「来たか、アズフェルトよ」

威勢のいいしわがれ声が上がってきた。

階段の上には黄金の玉座が三脚並んでいる。中でも一際豪勢な真ん中の玉座から恰幅のいい男が立ち上がった。

「レーヴェン大公閣下」

敬礼をして、アズフェルトが跪く。思わず上を見上げそうになったシェイラも慌ててそれに倣った。

「本日は大公閣下御自らのご招待いただき、まことにありがとうございます。ご尊顔を拝す貴重な機会に預かり、恐悦至極に存じます」

滑らかに口上を述べるアズフェルトを見下ろし、大公は満悦そうに頷いた。

「よう参った。待つておったぞ。さあ、面を上げよ」

はいと返答してアズフェルトが立ち上がる。だがシェイラはそのままの姿勢で待った。

許されるまで決して顔を上げてはいけない。それが王たる者に見える時のしきたり。初見の者はたとえ気付かれず永遠に跪くはめになっても待つのが礼儀だという。

忘れられていたらどうしよう——内心不安になったが、大公はすぐにシェイラの存在に気がついた。

「おや、今夜は連れがおるのか。どなたじゃ？」

——来た。ドクンと心臓の音が飛び跳ねた。

「はい。事前にお伝えはしておりますでしたが、本日は大公閣下に大事なご報告がございまして、連れてまいりました。——私の婚約者です」

ざわり、と大きく大広間の空気が揺れた。

「婚約者……とな。それは初耳じゃ。これは驚いた」ほう、ほう、と繰り返し大公が頷く。「急なことじゃが朗報じゃ。——彼女を前へ」

差し出されたアズフェルトの手をとって立ち上がり、シェイラは数歩前へ出た。

——しっかりやるのよ。

内側からベールを持ち上げる。

この覆いをとつたら、別の自分になる。人形娼婦でも田舎娘でもなく、貴族の令嬢に——。覚悟を決めてベールを落とし、シェイラは深くお辞儀をした。

「シェイラ・アルニーと申します。お目通りを賜り感謝いたします、大公閣下」

透き通った声を響かせ、シェイラはふわりと微笑んだ。花びらの様にアンダードレスを重ねた純白のドレスの裾を広げるその姿は、

まるで一輪の白百合——貴婦人にふさわしい柔らかで美しいその物腰に、広間中からため息が漏れた。

それが批判ではなく感嘆を示す反応だと、シェイラにはわかった。その瞬間ためらいや怖れは遠のき、自信のような感情が自然と芽生えてきた。

「これはこれは、美しいお嬢さんだ」

大公がほう、と白眉に埋もれた双眸を見張った。

——この人が大公閣下。

噂でしか知らない雲上の存在をシェイラは興味を持って見上げた。真綿のような白髪と白髭にどっしりとした体軀という風采は、かつて“西の獅子”と呼ばれるほどの剣の達人だった頃の勇猛さや気概を感じさせる堂々としたものだ。

若かりし頃は輝くほどの美丈夫で、数年前に他界した大公妃とは大恋愛の末に結婚したという。今も結婚記念日を祝うほど愛妻家で愛娘を溺愛しているとのこと。だが目の前の迫力のある強面からは想像しがたい。

「そうかそうか、ようやくお主も身を固める覚悟をしたか。しかし、一体いつそのような話がまとまったのじゃ？ 皆も驚いておるぞ」

広間内の動揺を見渡して大公が問う。

「実を言うとまだ正式に婚約はしておりません」凜とした声でアズフェルトが答える。

「彼女の父上にご挨拶に伺った後、進めるつもりであります。ですが私にとって父のような存在でもある閣下には、先立ってご報告申し上げるべきかと」

「——そうか。それは嬉しいが……しかしアルニーという名の貴家には聞き覚えがないの」

大公の関心がシェイラに向く。今日のために叩き込んだ文字が頭の中に広がった。

「王都アデリアから参りました。わたくしの父は王医をしておりま
す」

「ほう、お父上は国医であらせられるか。それはご立派じゃな」

王医とは皇帝より承認を受けたもつとも位の高い医師のことだ。貴族ではないが、彼らはそれと同等の身分や名誉を与えられる。王医の肩書を持つ者は数多くいて、彼らは王家の専属医としてだけでなく、国の公認医師として民間治療も行っている。架空の人物が一人いたところで疑われはしないし、『侯爵家の嫁に見合う身分』としても悪くない。それがアズフェルトの用意したシェイラの“肩書”であった。

「以前王都に訪れた時、家人が病になり彼女の父上に診ていただいたことがあったのです。それがきっかけで親しくなりまして……この女性ならば私の力となってくれと」

この上なく優しく、アズフェルトが微笑みかけてくる。

そうして目を細めるだけで簡単に人を夢見心地に誘う至高の美貌。情感に溢れ、真実の響きを纏うその言葉がすべて偽りだと誰が気付くだろう。とんでもない役者だ——はじらうような微笑みで応えながらシェイラが内心呆れていると、豪快な笑い声が響いた。

「ははは！ ほれ見ろ、やはりわしの言うとおりじゃったろう」

さっきまで峻厳だったその顔を好々爺のように綻ばせ、大公が笑い出したのだ。

「いやいや、すまぬ。こやつがあまりに色気がないのでな、『お前も必ず運命の出会いをする』と豪語してやったんじゃ。お主は否定したが、わしは間違っていないかったな」

呆氣にとられたシェイラに大公が目配せする。マラウクを上げば、困ったように苦笑を浮かべていた。

「そのようです。こうなつては負けを認めるしかありませんね。――

――正直、初めて彼女を見た瞬間、目が離せなくなりました。一目ぼれだったのでしょうかね」

――うわ、この大ウソツキ。

互いに微笑み、見つめあいながら、シェイラはそう罵りたい気持ちをぐっと押さえ込む。そんな葛藤も知らず、皆の羨望を集める貴

公子は余裕たつぷりに演技を続ける。

騎士とは国や人を陰から支え守る外壁。守護者の誓いを立てた時から、私はロザリアムの国民の平和と幸福に身を捧げようと決意し、そのために不公平な感情は排除すべきだと考えてきましたが――」

「何を言うとする」呆れたように大公が遮る。

「数々の軍功を誇るシンクレア家の者が日陰の存在であるものか。似合わぬことを申すな。リジョン騎士団は我が国の輝かしい飛躍の象徴じゃ。お主には総長として、さらなる盛名のために力を注いでもらいたいと思うておる」

「閣下、私は……」何か言いかけてためらい、アズフェルトは視線を下げた。そして小さく首を振り、もう一度大公を見上げた。

「……もちろんです、我が主君の仰せのままに」

「うむ、期待しておるぞ。お主が団長に就任して以来、志気が高まりみないっそう使命感に燃えていると聞く。さすがは聖騎士オーリオ・シンクレアの末裔じゃ。その遺志を継ぐにふさわしい。それにめでたく生涯の伴侶も得たしの。みなの方、ともに祝おうではないか！ 我が国の花形騎士の新たな門出と、みなで迎えし多幸に満ちたこの夜に！」

大公の掛け声で、楽隊が軽快な舞曲を奏で始め、優雅な喧騒が舞い戻った。

黒衣の美女

「ダンスはお好きかな、シェイラ嬢。おそらく夫君ともどもこれから質問攻めに合うじやろうが、楽しんでいかれよ。心よりそなたを歓迎する」

「はい、ありがとうございます」

大公が玉座に下がる。それを見計らっていた人々がシェイラたちの元へ群がった。

「おめでとうございます、シンクレア卿。お美しい婚約者殿であうらやましいですな」

「結婚式はいつ頃のご予定で？」

「お二人のなれそめをぜひ詳しく聞きたいですわ」

次々と祝いの言葉や贅辞、質問が飛んでくる。どの顔にも似たような愛想笑いがべつたりと貼りついていて見分けがつかない。まるで同じ仮面を被っているみたいだ。

「ありがとうございます。詳しくは正式な婚約の後発表させていたたくつもりです」

一人一人ににこやかに対応するアズフェルトに寄り添いながら、シェイラもなんとか強引に笑顔を作る。持久戦を覚悟した時、高らかにファンファーレが鳴り響いた。

「ごきげんよう、皆さま」

後方の大扉がぱつと開かれ、深黒の衣装を纏った美女が現れた。

長いトレーンの黒レースのローブに、首元には蜘蛛の巣を思わせる豪華なブラックオニキスの首飾り。高く結いあげた黒髪は黒い尾羽の帽子で飾り、胸元の大きなガーネットのブローチだけが、唯一鮮やかな光彩を放っている。その姿はまるで冥夜の女王——禍々しさと妖艶さを併せ持つ派手な美女だった。

「おお、マギー！ 待つておったぞ、我が愛しの娘よ」

愛娘の奇抜な登場に、上機嫌で大公が玉座から腰を上げた。

白で統一された世界を切り裂くように、ロザリアム公女・マグノリアは孔雀の羽扇を広げゆったりと歩き出す。そして低い位置で迎えたシェイラたちの横で止まり、父親を見上げた。

「ごめんなさいお父様、遅くなって。帽子選びに手間取ってしまいましたの」

「そうか、それは仕方ないのう。その甲斐あって素晴らしく美しいぞ」

親ばか丸出しの猫撫で声。さきほどまでの威厳漂う権力者は幻だったかのような変わりようだ。娘に大甘だという噂は本当だったとシェイラは知った。

「お父様こそ今日はお髭がつやつやでいい感じですよ。——まあ、アズフェルト様！ いらっしやっていたのね！」

アズフェルトを見つけ、マグノリアの華やかな顔立ちがいつそう輝いた。その場から黒いレースの手袋をはめた手を差し出す。前に進み出てアズフェルトはその手を取った。

「——ご無沙汰しております、マグノリア姫。お元気そうでなによりです」

本来ならば、ここで指先への口づけをするのが高貴な女性への礼儀だ。だがそうしなかったアズフェルトに、マグノリアは顔を曇らせ——そして針のような長いまつげにびっしりと縁取られた、二つの黒曜石を攻撃的に光らせた。

「……アズフェルト様、その方はどなた？」

内に秘める過激さがのぞく鋭い眼差し。射すくめられ、シェイラは身を固めた。

「おお、そうじゃ、紹介せんとな。王都からいらしたシェイラ・アルニー嬢じゃ。先ほど報告を受けたばかりじゃが、なんと二人は婚約したそうだな。お前も挨拶を」

「……婚、約？」

びっくり、とマグノリアの赤い唇の端がわずかに動いた。

「まあ、本当ですの——？ それはぜひともご挨拶したいわ」

跪くアズフェルトの横をすり抜けて、マグノリアが近付いてくる。上がる心拍数を抑えて、シェイラは腰を落とし一礼した。

「はじめまして、シェイラ・アルニーと申します。公女様におかれましては……」

「まーあ、なんてかわいらしい方！」

黒レースの手袋をはめた手が、シェイラの頬に触れた。

「素敵な金の髪ね、なんてうらやましい。肌も透き通るようだし」
長い指が、髪を、輪郭を調べるようになぞっていく。

「幸運な方ね、ロザリアムーの騎士を射止めるなんて。きっとみんな悔しがらるわ。でもわたくしは心から祝福するわ。彼は国の誇りであり、わたくしにとっても信頼できる友人ですもの。おめでとう」

気品あふれる微笑みを浮かべ、マグノリアが握手を求めてくる。

向けられた好意にほっとしてシェイラはその手をとった。だがすぐに凍りついた。

——え？

マグノリアの顔に笑顔はなく、かわりに激情に燃える眼差しがシェイラを見下ろしていた。だがそれはほんの一瞬のこと——次の瞬間には微笑みは元の場所に戻っていた。

「これからよろしくね、シェイラ。私のことはマグノリアと呼んで。お友達が増えてうれしいわ。ぜひ今度お茶会にいらして」

歓声と拍手が起る。握手の手をはなし、マグノリアはくるりと身を翻した。

「さあ皆さま、時を忘れて踊り明かしましょう！ アズフェルト様、踊ってくださいるわよね？」

「え？」

戸惑いの色を走らせたアズフェルトを振り返り、マグノリアは再び手を差し伸べた。

「いつも通り一曲目のお相手をお願いするわ。美しい婚約者以外に

“忠誠のキス”は出来なくても、そのくらいの思いやりは持つものよ、シンクレア卿？」

仮にも目の前に婚約者であるシェイラがいるにも関わらず、大胆な行動だった。

だが主君の娘である彼女に対し、意見出来る者はいない。貴族として最高位の爵位を保持するシンクレア家の当主としてそれは同じだった。

「……もちろんです。我が姫君」

「すまない」というような一瞥をシェイラに寄越し、アズフェルトは前に進み出た。

「さあ音楽を！ 楽しい夜の始まりよ、もっと情熱的な曲にしてちょうだい」

楽隊の奏でる音楽が一変した。緩やかで優しくかった旋律が、嵐のように力強く加速する。

——な、なにあれ……！

立ち尽くしたまま、中心部へと向かう二人の姿をシェイラは呆然と見送った。

なんだか挑戦状を突きつけられた気分だ。それにさっきの目——まるで憎しみと怒りで出来ているようだった。あんな風に敵意を向けられたのは生まれて初めてだった。

「あの、シェイラ嬢。よろしければ私たちと一曲踊っていただけませんか」

おさまらない鼓動に困っていると、数人の男たちが近寄ってきた。「え！？ あ、はい、あの……」

気が動転したままで対応できない。

こういう時はどうするんだっけ——思いつかずシェイラが口ごもっている、

「諸君——申し訳ない。ダンスの相手は僕が予約済みでね」

ふわりと背中を抱かれ、輪の中から救いだされた。

幼なじみ

「ウィル様！」

唯一心の許せる協力者の登場に、シェイラは思わず破顔した。

「お姫様の救出、無事完了。これで総長にお咎めを受けずに済む」

シェイラを誘おうとしていた準騎士たちがぽかんとこちらを見ている。見せつけるように身体を寄せ、ウィルが耳元で囁いた。

「何かあつたら君のそばにいてくれて頼まれたんだ。さっきは大丈夫だった？」

「ええ、ちよつと驚いたけど。あ、あのねウィル様、私この曲知らないんだけど……」

不安に急かされシェイラはウィルにそつと切り出した。習ったワルツもなんとか、というところでこんな早い曲には到底合わせられない。

「よかった、じつは僕もこの難曲は踊り切る自信がない。じゃあ隅へ移動しよう」

空いている長椅子を見つけると、曲に合わせながら人込みを抜け、ウィルはシェイラを窓辺へと導いた。椅子に座った途端、ほつとして肩の力が抜けた。

「いやー、見事だったよ、さっきの挨拶！ あれなら誰も君を疑いやしない。それにすごくきれいだ、他のご婦人らがかすむくらいだね。みんな見惚れてたよ」

「あ、ありがとう」

相変わらずウィルの賛辞には気恥ずかしくなる。顔が熱くなりそうなのをごまかすために、シェイラは話を変えた。

「でもちよつと心配なの。……人形娼婦だって誰かに気付かれないかって」

「それは心配ないよ。だって、この場にいる全員がお互いのことをちゃんと把握出来てると思う？ 何度顔を合わせても名前すら出て

こない人もいる。もし君を見たことがあっても、わかるわけないよ。それに、今はみんなあの二人に夢中だ」

ウィルが指し示す方へシェイラは目を向けた。

「すごいね、あの二人」

広間の中央では、アズフェルトとマグノリアがため息が出るほど優雅な舞踏を披露している。白と黒、その対照的な世界が見事に重なり合い、人々の視線をさらう。

「フィーは何をやらせても完璧だよ。舞踊でも剣術でも。アデリアの士官学校時代は剣技大会はいつも優勝、成績も首位。ご婦人からの手紙の数も一番」

最後だけくやしそうにウィルが言う。

「きれいな方ね、公女様って。……ちょっと怖いけど」

気高さと妖艶さが溶けあった危うい美しさ——大公妃エレオーラは稀代の美女として有名だったが、どうやらそれはきっちり遺伝したようだ。

「そう？　僕には君の方が何倍もきれいだと思うけどね。確かに目をひくけど……昔はもっと清楚で大人しかったんだよ、マグは」

マグ？　大公のような親しい呼び方にシェイラは首を傾げた。

「ああ、実はね。僕ら三人は幼馴染なんだよ。父親について僕とフィーは小さい頃からよくサー・ハウスに来てて、マグと一緒に遊んでた」

「……そうなの。侯爵はそんなこと一言もいってなかったわ」

彼女がアズフェルトのことを『信頼できる友』と言ったのはそういうことだったのか。

「小さい頃は内気で、鼻のそばかすばかり気にしてて。あんなきつい感じじゃなかったんだよ。もっと優しく素直で……でも半年前くらいかな、あんな風変わったのは」

どこか遠い目をして、ウィルが支柱に背中を預けた。

「毎日黒い服ばかり着て、化粧も濃くなって。近頃は、物置になってる北の塔にこもって、古文書とかあやしい魔術書を読み漁って、

何かの実験をしてるらしい。それでついたあだ名が“魔女”。親しい取り巻きしか近づけさせないし、僕もすっかり疎遠だよ」

——魔女……確かにね。

それにあの迫力はただものではない。呪い殺す力くらいありそうだ。

「でもお似合いね、あの二人」

並んでも遜色のない美しさ。額に入って壁に飾られていてもおかしくないくらいだ。それに身分からいっても一緒になって当然の二人だろう。そう言うとうイルが笑った。

「それ、フィーが聞いたら青ざめるよ。だって彼女から逃れるために、君を婚約者に仕立てたんだから」

「——え！？　そうだったの！？」

だからあんな目で睨まれたのだ——ようやくつじつまが合って、今さらながらシェイラは引き受けたことを後悔した。

「昔からマグはフィーに夢中なんだ。残念ながら彼女の完全なる片思いだけど。フィーは恋愛には無関心でね。今までははぐらかしてきたみたいけど、マグもめげなくて睡眠薬とか媚薬を盛ろうとしたり……。でも大公の娘だから無下には出来ないし、マグに睨まれたくないから他のご婦人たちは迂闊にフィーと仲良く出来ないし。聞いた話じゃ、抜け駆けしてひどい目に遭った子もいるとか……」

「ひ、ひどい目って？」

「よく知らないけど、陰湿ないじめ？　そんなんだから“魔女に魅入られた”なんて噂もたつ始末でね。今は大公が離そうとしないからいいけど、マグももう十九だし。『婿になれ』と言われるのも時間の問題って感じで、あいつ危機感感じてたんだ」

「それが“魔女の呪い”ってわけ。なんか、ばかばかしいほど私的な問題ね……。どうしてそこまで侯爵は嫌がるの？　公女様と結婚すれば出世間違いないじゃない」

富と権力の亡者、それが貴族。有益な結婚は誰もが望みそうな気がするけれど。

「うん——理由はね『彼女が本当に魔女だから』だって」

「……本気なの？」

「まあ根拠はあるみたいだよ、僕にはわからないけど。でもあいっだいぶ追い詰められて……見かねて僕が提案したんだ。『娼婦でも買って婚約者のふりをさせたら』って」

——え。

シェイラは固まった。今、聞き捨てならないことを聞いたような気がする。

「僕が……って、まさか、この計画はウィル様が考えたの？」

「あ……うん、実はそう。冗談のつもりで言っただけで、フィーは真に受けちゃってさ。まさか本当にやるとは思わなかったんだよ。ほんとごめん、巻き込んでっ！」

両手を顔の前で合わせてウィルが謝ってくる。

——シヨックだ。なんだかものすごくシヨックだ。一連のことはすべてアズフェルトの独断だと思っていた。だからウィルは好意で親身になってくれているとばかり……。

——でも……発端はこの人の余計なひと言だったのね……！

実際は罪悪感から様子を見に来ていただけだったのだ。がつくりと肩から力が抜けた。

「ご、ごめんね黙ってて。なんか言いずらくてさ……無理矢理頼んじやったところもあるし。でもまさか一週間でここまで完璧にやりこなすなんてびっくりだよ！君ならこの先も立派にこなせる！ここまでできたら最後まで頼むよっ」この通りと懇願するウィルの向こうで、曲の終りを告げる最後の一音が弾んだ。

歓声と拍手が広間を埋め尽くす。

盛り上がるにはほど遠い気分シェイラはため息を吐き出した。

月影の道化師

「ふう」

大理石の柱の陰から周りに誰もいないのを確認して、シェイラは胸を撫で下ろした。

一曲目がすんでアズフェルトが戻ったのも束の間、今度は人々の挨拶攻めにあつた。

伯爵だの男爵だのその妻だのと何人も紹介され混乱寸前のところに、今度は女性たちに囲まれ――。アズフェルトはアズフェルトで騎士団の関係者や交流のある貴族たちに捕まり、頼みのウィルはダンスの相手をせがむ取り巻きの令嬢たちに連れていかれてしまった。そして婚約に興味津々の女たちに根掘り葉掘り訊かれ、やっと終わったと思つたら今度はアズフェルトの姿がない。もう我慢できず広間を抜け出してきてしまった。

――いったいどこへ行つたわけ？

よろよろと、柱に手をつきながらシェイラは回廊を歩き出した。守るとかいったくせに、なんて無責任な。苛立ちを噛みつぶしていると、

「……笛の音？」

風の音かと思つたが違う。この先から聞こえてくる。

支柱の並ぶ回廊を進み、アーチ型の入口をくぐり抜ける。その先は細長い塔の中だった。

炎を宿した大きなランタンが上から長い鎖でつり下げられている。石造りの壁に沿って螺旋階段が上下に伸びている。

――この上からだ。

小川のせせらぎのような美しい音色にひかれて、シェイラは階段を上っていった。

階段の途切れた先は小さな石室になっていた。石壁を大きくくり抜いた窓からは外の景色が見渡せる。そこに一人の男が座っていた。

「——おや、夜陰にまぎれて天使がお見えになった」

石床に置かれた小さな燭台の炎が夜風になびく。笛をおろし斜めに被った羽根つき帽子の縁を、男は会釈代わりに少し下げた。

「あなたは……」

薄暗いのと、長い前髪に左半分が隠されていて顔はよく見えない。だが年は二十代半ばほどだろう。くたびれたシャツにリボンタイ、そしてたてじま模様の吊りズボンという出で立ちには見覚えがあった。

「コールリッジ伯爵邸のパーティにいた……？」

寸劇をした旅一座の役者だ。幕の陰から広間を覗いた時に見た気がする。

「おや、お嬢様もあのお屋敷に？ 覚えていただいていたとは光栄です。しがない旅一座の座長、エルヴィスと申します」

長い足をするりと窓から下ろして立ち上がると、エルヴィスは帽子を取り芝居じみたお辞儀をした。道化師のようなおどけた雰囲気、気分が和む。

「こんばんは、座長さん。私はシェイラよ。さっきの曲はあなたが？」

「はい、ティン・フルートという古い楽器です。お気に召しましたか？」

手に持つ細い銀色のたて笛を、エルヴィスが見せた。

「ええ、すごく素敵な音色、春のそよ風みたいで。思わず追いかけてきちゃったの。でも、どうしてこんなところに？」

「怖れ多くも本日は大公閣下よりお招きに預かりまして、芝居を披露させていただくことになっております。ですがわたくしどものような端の者が、このような大役を仰せつかることなど未曾有の事態。落ち着かず、一曲奏して気を鎮めておりました」

上がり症でして、とそうは思えない落ち着き払った声で言う。

「さっきの曲は、あなたが作ったの？」

「いいえ、とんでもない。神々の伝説や神話をもとに作られた『聖曲』と呼ばれるものの一つです。我々は各地に伝わる伝説や神話を題材に、即興詩や芝居を行っておりまして」

「伯爵邸でやった『ガードルードの魔女』みたいな？」

「そうです。本日も大公様のご所望で同じ演目を。この間はいかがでしたか」

そう訊かれて、シェイラは言葉をためらった。

「……ごめんなさい、実は見ていないの。私は招待客じゃなかったから」

別にこの男に話したところで害はないだろう。正直に告げる。

「本当はお嬢様でもないの。ふりをしているだけだから。でも疲れちゃって、逃げてきたところ。やっぱり慣れないことって難しくて」

エルヴィスの座っていた石窓に座り、シェイラはヒールのついた靴を脱ぎ落した。

「ふり、ですか」

「そう、とっても複雑なの」慣れない靴のせいでじんじんする足先を冷たい石床に下ろし、シェイラは肩をすくめた。

「でも魔女の話は知ってる。有名なもの。人間の男の魂が好物の魔女を伝説の騎士が滅ぼす、英雄物語でしょう？」

「そうですね、見ようによつては。でも本当は、悲しく純粋な恋の物語なんですよ。“魔女”と呼ばれて恐れられてしまった、一人の可怜的女性のね」

「女性？ 魔女は人間だったの？」

シェイラは目を瞬く。笛をスボンに差し、小さな火の灯るろうそくをエルヴィスがそつと持ち上げた。

「そう。彼女は最初は魔力など微塵も持たない人間だったのです。だが一人の男を愛し手に入れたと思うあまり、本当に魔性に魅入られてしまった」

揺らめく赤い炎の向こうで、エルヴィスが不思議な虹彩を放つ右

目を細めた。

「愛しすぎて、おかしくなっちゃったってこと？」

「恋は盲目、と申しますでしょう——？ 時に美しいはずの感情はどす黒い狂気となり、人を傷つける刃となる……。身分違いの恋に苦しみ、女は禁じられた魔術に手を出した。そして狂気にとり憑かれ魔女となった。無差別に人々を襲い傷つけ……。その代償に処刑された。長い歴史の中で物語は都合よく作り変えられてしまいました」

「……初めて聞いたわ、そんな話。じゃあ本当は神秘的なおとぎ話なんかじゃないのね」

「今では立派な伝説ですよ。人々が信じれば、それは嘘ではない。人の世では嘘と真実はつねに隣り合わせですから」

「そうかもしれないけど、でも——」

石壁にもたれ、雲がさまよう夜空をシェイラは見上げた

「本当は悲しい話なのね。愛しすぎた結末っていうか……。でもきつと苦しくて怖かっただろうな。それほど人を好きになるのは」

自分にはそんな経験はないけれど、もしもそうになったらどうするだろう？

絶望に支配され誰かを傷つけてもいいと思ってしまうかもしれない。

目撃

「——いけませんよ、同調しては」

誰かに聞かれまいとでもするようにエルヴィスが声をひそめた。

「魔に魅入られてしまいますよ。彼女の魂はまだ、この世に残っているかもしれない。狂気を植え付ける清らかなで純粹な苗床こゝろを探して——ね」

手の中の小さな灯火に、エルヴィスがふっと息を吹きかけた。明かりが消え、視界が暗闇に落ちる。石室の無機質な冷たさが、急に肌にまとわりつく。

「特に今夜のような不吉な夜は、何が起こるかわかりません」
暗夜と同化した空間に、謎めいた響きが溶ける。その時かすかな光が肌に触れるのを感じて、シェイラは夜空を見上げた。

雲の切れ間から月が顔を出そうとしている。
ぼんやりとかすむ銀色の爪のように細い月。
流れる雲の檻が開かれ、影絵の世界がほんの少し明るくなる。

「うつろう月の魔力に魅せられ、さまざまな思惑や罠が動き出す……
ほら兎がやってきた」

じよじよに目が慣れてきた暗闇の中、いつの間にか横に立っていたエルヴィスが窓の外を指さした。

月に向けていた視線をシェイラは下げる。塔の下に生い茂る木々の間を何かが横切って行くのが見えた。

ウサギ？

違う、人間だ。二人いる。あれは——

「ああっ！」

先頭の人影が持つランタンの明りで、一瞬その姿が見えた。

——アズフェルトと、マグノリア姫……！

間違いない。田舎育ちで目はいいのだ。いないと思ったらこんなところに——思わずひくつと口の端が引きつった。

「ちよつと何してるわけ！ あの二人！」

急いで靴を履き、シェイラは走り出した。だが階段の前ではたと我に返る。

——ちよつと待って……なんで私追いかけようとしてるの？

別に二人が一緒だからって焦る必要なんてない。人を放り出して逢引してるのは気に食わないけど。ていうかアズフェルトはマグノリアから逃げていたのでは？

「おや？ お知り合いですか？」

「知らない。ぜんっぜん知らない！ 見間違っただけだ！」

振り返ってぶんぶんと首を振る。ふうんと呟いてエルヴィスが林の奥へ遠ざかっていくランタンの明かりを見つめる。

「そうですか。でも彼、危険ですねえ」

「え？」

「月に……付き纏われている。強い輝きを内に秘めているのに、闇の呪縛に侵されている。このままじゃ危ないですねえ」

——月？ 闇の呪縛？

何のことやら。シェイラは肩をすくめた。

「私にはどうでもいいことよ、見ず知らずの人だし！ でもなんかイライラしてきたから、お菓子でも食べにいくわ。ごきげんよう、座長さん！」

大広間の隣の貴賓室には軽食の準備がしてあった。大公の城だ、きっと見たこともないような豪華な茶菓が山ほどあることだろう。こうなったら食べてやる。コルセットが弾け飛ぶくらい食べてやる

「では、私もそろそろ行くとしましょうかね。余興の準備をしなくては——ああ、そうだお嬢さん。彼を追いかけるならこれをお持ちなさい。王子を救う鍵になるかも」

階段へ向かおうとしたシェイラの手をエルヴィスが引き止め、そつと何かを握らせた。

「……お氣をつけて。女神のご加護を」

夜気のように涼やかなエルヴィスの声が、耳元をかすめた。

「えっ、何？　だからあんな人ぜんぜん知らないって——」

振り返って文句を言おうとして——シェイラは目を疑った。

いない。出口はひとつしかないのに。

男の姿は消え失せていた。だが石窓の縁には、消えたはずの小さな炎が置かれている。

まさかと思って駆け寄り、シェイラは下を覗き込んだ。

「ど、どうなってるの？」

唖然としつつ窓から身を引いて、ふと手の中の感触を思い出す。

そつと指を開いてティティーリアははつとした。

小さなガラスのビン。中には茶色い液体が入っている。

「木蓮の紋章……これ、侯爵のだわ」

——どうしてあの人が？

考えてみるが疑問符しか浮かばない。……とりあえず諦めた。

——まあ……いいか。

とりあえず持つておこう。いざというとき責任追及の際のいい切

り札にはなる。でも届けてなんかやらない。持っているだけだ。握りしめ、シェイラは螺旋階段を下った。

「あ、いた！ シェイラ！」

アーチをくぐって回廊に戻ってきたところで、慌てた様子のウィルと出くわした。

「よかった、どこにいつちゃったかと思ったよ。さっきはごめんね、彼女たち強引で断れなくてさあ……て、フィーは？ 一緒じゃないの？」

シェイラが一人であるのを見て、ウィルが首を巡らせる。

「知りません。でも探す必要ないと思います」

ぴしゃりと言いつつ。——ああ、猛烈に甘いものが食べたい。

「へ、どういうこと？ 何かあった？ ——あれ、君が持つてるのって」

シェイラが手にしている小ビンに、ウィルの表情が険しくなる。

「やっぱり！ それ、フィーのだよな？ 拾ったの？ まさかあいつ落として——ねえ、本当に姿を見てない？」

急にそわそわし出したウィルに、「い、いいえ」とシェイラはとつさに否定した。

「ああああ、まったく何やってんだよ！ それがないと困るクセに」頭を抱えウィルが唸る。

「あの、これ、ただのお酒でしょう？」

「うゝゝそうなんだけど、そうなんだけどあいつには必要なんだよ

……あつ——」

困惑した顔を上げたと思うと、今度は回廊の手すりに飛びついた。「やばい、月が出てる——こりやまずいぞ」

雲が切れ、夜空が晴れていく。振り返り、ウィルが叫んだ。

「頼む、シェイラ、フィーを見つけるのを手伝って！ 一刻も早くそれを渡さないと」

いつもの紳士ぶりはどこへいったのか、力強く肩を掴まれシェイラは狼狽する。

「わ、渡すってこれを？ どういうこと？」

「月に酔うんだ！」

「はっ——？」

「だからその前に止めなきゃ——僕はもう一度広間を見てくる！君はとりあえずこのへんを探して。急いでね！」

「ちょ、ちょっと待って！」

当惑するシェイラを残し、ウィルは走って行ってしまった。

——行かないわよ……私。

ふるふると、小さく首を横に振る。

これ以上巻き込まれたくないし。お菓子食べなきゃだし。

手の中のピンをシェイラはぎゅっと握りしめた。

月夜の逢引（前書き）

大変遅くなりました。

第四幕スタートです。よろしく願います

月夜の逢引

サー・ハウスから少し離れた林の中。池のほとりに建つあずまやの中に、二人の人影が向かい合っていた。

「……アズフェルト様」

穏やかな水面には、途切れることなく雲の流れる夜空が映し出されている。時折気まぐれに月が現れては隠れ、闇はかすかな明暗の点滅を繰り返す。

「ごめんなさい、わがままを言って」

水鏡の方を向いて立つ男の背に、女がそつと身を寄せる。黒いドレスに黒いベールという出で立ちは、まるで夜の化身のようだ。

「でもこうでもしなければ、貴方はわたくしと二人きりにはなってくれないから……。どうしても、ほんの少しでもいいの。わたくしの話を聞いていただきたくて」

悲愴感をまとうその声は、艶めいて甘い響きを持っている。

「——姫君」

白い礼服姿の男が女を振り返った。

——……なに、してるんだろう。私……

木の陰からその光景を盗み見ながら、シェイラは自問せずにはいられなかった。

絶対に探しになんかいかないと誓ったはずだ。だが今、自分はアズフェルトと公女マグノリアの逢引現場の目と鼻の先にいる。完全なぞきである。

手の中にはエルヴィスから渡されたガラスの小ビンがある。だがこの状況でどう渡せるというのだろう。ここまで来てしまつて、今さらシェイラは後悔していた。

「姫君なんて呼ばないで。今は二人きりよ。いつものようにマグノ

リアと呼んで」

アズフェルトの胸にマグノリアが飛び込む。

「姫、いけません。人目がないからといって軽率なことは」

「やめて、そんな他人行儀な言い方！ わたくしの気持ちを知らせてくせに！」

顔をそむけるアズフェルトに、マグノリアはさらにすがりつく。

「わかってるわ、貴方にとっては迷惑な想いだってこと。でも、ずっと見てきたのよ。小さな頃からずっと……それなのに婚約者だなんて！ ひどい、ひどすぎるわ」

すすり泣く声が聞こえてくる。胸を貸したまま、アズフェルトは黙って聞いている。

「貴方はわたくしに言ったのに。“君と出会ったのは運命だ。こんな奇跡はきつと一生に一度しかない。”って、私を抱きしめてくださったのに……！ でも次に会った時にはいつも通りそっけなくて……まったく覚えていないなんて！」

マグノリアが本格的に泣き始める。とんでもない話に、シェイラは鼻頭にしわを寄せた。

「ひ、姫。申し訳ありませんが、その件については言い訳をせねばなりません。実は——」

「いや！ 聞きたくありませんわ！」アズフェルトの胸を突き返し、マグノリアが耳を塞ぐ。

「気の迷いだつたとしても言うのでしょうか。でも、それでもわたくしはうれしかったの……！ あんなに美しい月夜は今までに一度もなかったわ」

——あゝのゝ男は——！

シェイラは拳を震わせた。

どこでも同じことをしているわけだ、あの遊び人の侯爵様は！

まさか公女にまで手を出していたなんて——

「覚えていないなんて、嘘なのでしょう？ ほら、あの時もこんな月夜でしたのよ」

手すり間際まで、マグノリアがぐいとアズフェルトの腕を引く。ちょうど雲が途切れ、ふんわりとした線のような月が空に現れた。

「あ……」

アズフェルトの体がぐらりとよろめいた。上半身を折り曲げ、手すりに手をつく。

「どうなさったの、アズフェルト様？ 顔色が急に――」突然の変調にマグノリアが慌てる。

「大変、ここへお座りになって。スプリングを用意させましたの。すぐ持ってきてますわ！」

石の腰掛けにアズフェルトを座らせ、マグノリアは隅にあるテーブルに駆け寄った。

スプリングとはレモンやぶどう、リンゴなどの果物をつけ込んだパーティーでは定番の飲み物だ。ちょうどシェイラの隠れている方を向いているので、マグノリアの手元が見える。水差しをとり、中身をグラスに注ぐ。そして持っていくと思いきや、マグノリアは胸元から何かを取りだした。

――何かの……ビン？

すばやくふたをはずし、中のものを数滴スプリングに落とす。そして再び胸元に仕舞い込み、グラスを手にアズフェルトを振り返った。

――い、入れた……！ まさか、毒……？

ひやりと体が冷たくなったのをシェイラは感じた。

「もしや弄ばれた腹いせ？ 自尊心の高い公女ならば許しがたい屈辱だろう。」

「さあ、マラウク様。お飲みになって。少し楽になるわ」

マグノリアが差し出したグラスを、うな垂れたままアズフェルトが受け取った。

――ど、ど、ど、どうしよう！

毒だったら。でも違つかもしれない。

公女がアズフェルトを好きならば、そんなことをするはずはない。でも何か入れたのは事実だ。確かに何か——入れたのだ。

アズフェルトがグラスを口元に持っていく。

『古文書とかあやしい魔術書を読み漁って、実験みたいなことをしてるらしい——』

ウィルの言葉を思い出す。唇に届くまであと少し。もうどうにでもなれ——シェイラはぎゅっと目をつむった。

「アズフェルト、飲んじゃだめ!」

豹変

木の陰からティティリアは勢いよく飛び出した。

アズフェルトが驚いた様子でグラスを口から離す。マグノリアが振り向いた。

「あなた――」

迫力ある美貌が憤怒の形相になる。

――やややや、やつちやつた……！

血の気が一気に引いた。でももう後戻りは出来ない。

「……シェイラ」

グラスを置き、青ざめた顔でマラウクが立ち上がった。「……心配して来てくれたのか。すまない、何も言わずにいらなくなって」

アズフェルトが目配せしてくる。その意味に気付き、シェイラは言葉を合わせる。

「え、ええ、そうなの。姿が見えなくなって心配で……。でもまさか公女様と一緒とは思いませんでしたわ。取り乱して大変失礼をいたしました」

マグノリアに向かって丁寧に頭を下げる。葉っぱや土で汚れたドレスの裾が目に入った。

「マグノリア姫」あずまやを降り、アズフェルトがシェイラのところまでやってくる。

「私は彼女を愛している。だから貴女の気持ちには答えられない。……申し訳ありません」

力強く肩を引き寄せられ、弾みでシェイラはアズフェルトの胸に突っ伏した。苦しい息遣いと早鐘のような心音が耳から伝わってくる。

「……そう」

静かにマグノリアが言った。「その方が大切なのね。わかりました」

顔を上げた時、去ろうとするマグノリアと目が合った。

「でも、わたくしは……わたくしは諦めませんわ！ ええ絶対に、絶対によー！」

大広間で見た時と同じ、燃える炎のような眼差しだった。

熟れたリンゴのような赤い唇を噛みしめ、黒衣の女王は踵を返す。そして闇の向こうへ足早に去って行った。

「……い、いっちゃった……」

とたんに気が抜けて、シェイラはへなへなとその場に座り込んだ。恨まれてる。

絶対に恨まれてる。

やっぱりあの時睨まれたのは間違いではなかったのだ。とんでもないことに巻き込まれたのだと、シェイラはようやくはつきりと悟った。

「ど、どうしよう。ぜったい怒らせたわよね、公女様。わ、私不敬罪で首をきられちゃうんじゃない？ あああやっぱり助けなきゃよかった。えっ、ちよっ！？」

どさりと乗りがかかってきた重みに、シェイラは慌てふためいた。

「すまない……たすかつ……」

ぜいぜいと苦しげな呼吸を繰り返し、アズフェルトがもたれかかってくる。服の上からでもわかるほどその体は熱い。

「ちよっ、ちよっとうしたの！？ きゃーっ、倒れてこないでっつ！」

支えきれず、シェイラはアズフェルトの体を地面に転がした。草むらに仰向けに倒れ、アズフェルトが目を開く。ちよっどその

時月にかかっていたかすみが晴れ、澄んだ銀色の光が地上を照らし出した。

「う……っ」

小さく呻き、アズフェルトの体がびくんと痙攣した。

陶器のような肌に玉のような汗が浮かんでいる。尋常ではないと察し声をかけようとして、シェイラは——見た。

アズフェルトの瞳に、月光が吸い込まれていく。空から降りる砂のような銀色の微粒子が、きらきら光りながら落ちていく。

——瞳の色が——

青から金に変わっていく。

あの時の目だ、伯爵邸で見た時の——。

シェイラの前で、ゆっくりとマラウクが起き上がる。野性的に光る金色の目がシェイラを捕えた。

「……キスしたい」

「はっ？」

熱に浮かされたようなうつろな表情。危機感を感じて身構えようとしたが遅かった。仰向けに押し倒され両手を草の上に押し付けられる。手の中から小ビンが転がり落ちた。

「きゃーっ！ なにすんのっ!？」

「……しー、静かに。恥ずかしがるなよ、いい子だから」

「え、ちよっ……!？」

目が怖いんですけど――！？

強く抱きすくめられ目の前に火花が散った。

全身が心臓になったようにドクドクと脈打ち始める。アズフェルトの手が首筋から鎖骨へと降りていくのに気付いて、あらん限りの声でシェイラは叫んだ。

「い、いや――あつ！ お嫁にいけなくなったらどうすんのよーっ！」

「シェイラ！？」

その時、茂みの中から走り出てきたのはウィルだった。

「あゝもう！ このバカがつ！」

アズフェルトに掴みかかり、地面へと引き倒す。そして馬乗りになるとシェイラに向かって手を伸ばした。

「シェイラ！ あのビンは！？」

「えっ、あ……は、はい！」

草むらを見回す。すぐそばに落ちていたのを慌てて拾いミトに渡した。

「まったく、世話がやける侯爵様だよ！」

親指でビンのふたを弾き、ウィルは親友とは思えない乱暴な手つきでアズフェルトの襟首を掴んで引き起こす。そして顎を押さえると、口の中に小ビンの中身を流し込んだ。

「かはっ……！」

飲み干して数秒後、アズフェルトが目を見開いた。ウィルの手を振り払い激しくむせ返る。

「ウィ、ウィル様さすがに乱暴じゃあ……」

悶え苦しむアズフェルト。だがウィルはまったく気にすることなく、立ちあがって礼服の汚れを落とし始めた。

「大丈夫だよ、ほら」

ちらりと一瞥を投げた先で、がばつとアズフェルトが起き上がった。

「ウィル……！ お前——」

「なに？ 言つとくけど、僕は悪くないからね。君が理性を失いかけたところをまた救ってあげたんだから。謝るのは君だ、よっ！！」

ほら！ とウィルがアズフェルトの背中を肘で押す。草むらに果然と座り込んだまま、シェイラはただただ目を丸くするしかなかった。

「……どうということなの？」

乱れた髪から木の葉がぱらりと落ちた。それを見て、アズフェルトがはつと口元を押さえた。

「あ……まさか、また俺は君に——」

その目はもとの青色だった。顔つきも声も、いつものアズフェルトに戻っている。

「……あなた……いったいどうなってるの？」

あれは誰？ 姿は同じなのに、まるで違っていた。別の人格が乗り移ったような——。

「——これが……“呪い”だよ」

混乱するシェイラに向かって、力なくアズフェルトが呟いた。
「シンクレア家当主に代々受け継がれている……魔女の呪いさ」

秘密の花園

鳥の群れが黄昏の空を横切っていく。

金色のペールの降りた庭園では、咲き始めたバラの甘く爽やかな芳香がほんのりと漂っていた。

囁きのような夕風が、そつと花びらを揺らして通り過ぎる。庭園の奥にある鳥籠の形をしたあずまやの中に、シェイラは探していた人物がいるのを見つけた。

「……なんでここがわかったんだ」

気まずそうな顔が振り返る。

あからさまに落ち込んでいるアズフェルトの様子にシェイラは意識して明るい声で言った。

「サラが教えてくれたの、バラ園じゃないかって。でも広すぎて迷っちゃった。果樹園や礼拝堂もあるなんて、さっすが侯爵の邸宅よね〜！」

「……ここは俺の私的な庭だ。誰にも教えるなど言ってるんだが」
迷惑そうにアズフェルトが眉を寄せる。元気づけようとしていた気持ちが一気に冷めた。

「なによ、心配して来たのに失礼ね。今朝だって人の顔見て逃げ出すし」

朝一番に受けた無礼行為が甦る。アズフェルトに近づき、シェイラは両腕を組んだ。

ここ三日アズフェルトはあきらかにシェイラを避けていた。今朝なんて、顔を合わせた途端踵を返して逃げ出したのだ。

「言っとくけど、サラは悪くないから。帰って来たって聞いて、私が無理やり言わせたの。罰するなら私にどうぞ。煮るなり焼くなり好きにして」

「……俺をなんだと思ってる」

ふん、とすねた子供のようにアズフェルトが顔をそむけた。

「位が高い家に偶然生まれただけで、俺は別に偉くない。むしろ自分の人格管理一つ出来ない力のない人間だ。……軽蔑しにきたんだろっ」

卑屈さ全開の態度に、シェイラは呆れた。

「そんなつもりはないわよ。ただ話がしたかっただけ。……ここ、座ってもいい？」

ベンチの空いているところを指さす。少し間があって、アズフェルトが左端へとずれた。

「ありがとう。きれいなお庭ね。それにいい香り……もうバラが咲いてるのね」

右端に座って色づく景色を眺め、シェイラは胸いっぱい芳香を吸い込んだ。

「……早咲きのバラだ」

ぼつりとアズフェルトが言った。

「新種もいくつかある。茶花に合うか試しに植えさせてるんだ」

「ねえ、これはなんて名前？ 変わった花びらの形ね」

フリルのような花びらが何枚も重なったピンクのバラにシェイラは指先で触れた。

「……エレノア。オレの母親の名前だ。父がつけた」

「へえ、すてき！ 愛する人の名前をつけるなんて。こっちは？」

「それはまだ名前がない。……て、そんなことを言いに来たんじゃないだろう。聞きたいのは昨日のことでは？」

そう指摘され、「そうだった」とシェイラは指を引っ込めた。

「ええと……“呪い”は今平気なの？」

「ああ。変化が起きるのは月が出ている夜だけだ。それに気つけがあれば心配ない。身体が慣れたせいで、強い酒しか効かなくなったけどな」

『シンクレアの嫡男は、特異な体質を持って生まれるんだ。月を見ると人格が変わる』

昨夜、帰りの馬車の中でアズフェルトは“呪い”についてこう話した。

古の魔女キーラが祖先に、月を見ると本来の自分を忘れ別の人格になってしまふ呪いをかけたこと。変化すると軟派な体質になって、見境なく女性を口説いたり迫ったりしまくり、その時の記憶が一切なくなること。発動を防ぐためには気付けとなる酒が必要で、そのためにいつも持ち歩いていること……など。

「……毎日ホロヴァを届けさせてるのは、その防御策だったのね」
お菓子なら誰の目も気にせずお酒が摂取出来る。毎日大量に作らせるのは薬がわりだったのだ。

「ああ、ウィルの考えた。昔から悪知恵だけは働くやつで。でもそのおかげでずいぶん助けられてる。両親とスミッティ以外でこのことを知るのはウィルだけだ。あいつがいなかったら……今頃俺はヴィクトリアーの節操なしだったろうな」

……笑えないのは、自分も被害に遭ったからだろう。恐る恐るシエイラは尋ねた。

「あの……よくあるの？ 昨日や前みたいなこと」

「あるわけない！ いつもは細心の注意を払ってる。でもうつかり忘れることがあって……それで夜の外出はウィルに同伴を頼むんだが、あの日は任務が長引いてウィルが遅れて……君が去った後、変化したまま広間に入ろうとしたらしい」

迂闊だった、とアズフェルトが深いため息とともにうな垂れた。

「……『口封じ』の意味がわかったわ。確かにあれがばれたら大変だものね。だから私に婚約者役をやらせようと思ったんでしょ」

大金を積んでまで。きつと今までも同じように金銭でカタをつけてきたのだろう。

「……それもある。でも口封じは誤解だ。ただ込み入った事情で焦っただけ……」

「知ってる、公女様の求愛から逃れるため、でしょ。でもとっても

お似合いだと思っけど」

「——やめてくれ。……確かにマグノリアがああなった原因は俺にある。半年ほど前、すっかり彼女を口説いたらしくて……」

煩悶するアズフェルトにシェイラは疑いの眼差しを向ける。

「……ねえ、ほんとにそれって呪いのなの？ その、精神的な病気とかじゃ」

「い、異常者扱いするな！ 俺だって悩んでるんだ、こんな体質——でも手は出してない！ ウイルが探しにくるのが少し遅かったら……危なかったが」

「でも公女様は期待しちゃったわけでしょ。ふつつするわよね。好きな人に迫られたら」

「……わかってる、俺の失態だ。でも——あれは”魔女”だ」

美男子に似合わない、生気を欠いた暗い面相でアズフェルトがシェイラを見た。

「我が一族に呪いをかけた。シンクレアの当主たちはみな、あの存在に悩まされてきた。姿をかえてつきまとう悪霊に——君も魔女の話は知ってるだろう」

呪いと魔女

「知ってるけど」

と言いかけて、シェイラは昨晚のエルヴィスとの会話を思い出した。
「でもこんな話を聞いたわ。魔女は本当はただの人間の女性だったって」

「……ああ」じんわりと赤く染まっていく景色の方へアズフェルトは顔を向けた。

「その話は本当だ。魔女キーラはもとは人間の少女で、シンクレア家の使用人だった」

淡々と話し出した声にシェイラは耳を傾ける。

「俺の祖先オーリオ・シンクレアと彼女は幼なじみだった。キーラは美しく聡明な娘で、ずっとオーリオに思いを寄せていた。でもオーリオには恋人がいて相手にされなかった。キーラは嫉妬し……ついには恋人を死に追いやった」

鮮やかな夕光があずまやに差し込む。二つの影がモザイクのタイルの上に長く伸びた。

「そしてキーラは彼の心を手に入れようと禁断の魔術に手を出した。彼女の母親は邪術に精通する者だったんだ。人の心を意のままに操り支配する『月影の魔呪』、それを完成させるための生贄として、彼女は多くの男を誘惑して殺した。だがその秘密が暴かれ、魔女として火刑に処された。だが彼女の思いは強く、悪霊となつて残った。オーリオは大天使シリエルが残したといわれる宝剣で、悪霊を聖石に封じた。その時、キーラは呪いの言葉を残した。『たとえこの身が滅びても、どれほど時が流れようとも、私はずっとあなたを見ている。あなたが愛する者はすべて奪い、その心を必ず手に入れる』と」

「それが呪いの始まりってわけね。でも封印されたのに……なんで姫が魔女なの？」

「話はここで終わらないんだ」げんなりとした様子でアズフェルトが続ける。

「封印の石はシリエルを生んだミード湖の奥深くに沈められるはずだった。だがある時石は忽然と消えてしまった。金に困っていた下男が勝手に売りさばき、利益を持ち逃げしたんだ。結局その男は捕まらず、以来石は行方知れずのままだ」

「……じゃあ石が封印されなかったせいで魔女の怨念はこの世に留まり、何百年も時を超えて公女様として生まれ変わった……と？」

自分で言っていて、混乱してきた。シェイラは首を傾げる。

「生まれ変わった、というのは少し違う。でもマグノリアの中にその存在を……感じるんだ。うまく説明できないが、俺にはわかる。急に彼女が豹変したのもおそらくそのせいだ。そうやって魔女は、知らぬ間に誰かのふりをして俺たちの前に現れ大切なものを奪っていく」

アズフェルトが膝の上で両手を握りしめた。

「その呪いを解く方法はないの？ 昔の魔術の本とか」

「今のところ……ない。キーラとともに魔術関係の文献はすべて焼却されてしまったんだ。祖先の遺品や書物もしらみつぶしに調べたが、結局何も見つからなかった。あつたのは、悲しみや苦悩を綴った日記だけだ」

深いため息とともにアズフェルトが両手で頭を抱えた。

「誰かを愛するたびに、魔女は時を超え姿を変えて引き裂きにやってくる。気付いた時にはもう遅い……そうやって、父も祖父も他の当主たちも心を捧げた相手を失った」

「失ったって」シェイラがためらった言葉の先をアズフェルトが繋げた。

「呪いのせいで破綻したり、命を奪われたり……色々だ。『本気で人を愛するな』と俺は教えられてきた。家名のための結婚をした後も父が苦悩し続けていたのを俺は知ってる。だからその言葉に従い、自分のやるべきことだけを考えてきた。……だが魔女は俺の前に現

れた」

「……それがマグノリア姫？ うーん、確かに過激そうな人だとは思ったけど……」

マグノリアが飲み物に入れたのはおそらく媚薬だろうとアズフェルトは言った。以前にも何度か危ない目にあっただらう。

「信じられないんだろ。いいさ、こんな話普通はバカにされる。証拠はないしな。ウィルだって実際は半信半疑なんだ。でもぜったいに、間違いない」

髪の上に差し込んでいた手を膝の上に振りおろし、アズフェルトが言いきった。

「これからあは、きつと何かを仕掛けてくる。……婚約者を仕立てれば解決するなんて、我ながら甘い考えだった。彼女は俺を手にいれるため……君を狙うかもしれない」

「すまない、と生真面目さだけで出来たような顔で、アズフェルトが謝る。」

「す、すまないじゃないわよ!!」

真つ青になってシェイラは立ち上がった。

「殺されたらどうしてくれるの!? そりゃ私なんていなくなっても誰も気づかないような石ころみたいな人間ですけどね。素敵な恋とか何も知らずに死ぬのは絶対いや! いやなんだからっ」

冗談じゃない。借金返済のかわりに命まで取られるなんて。わけがわからずぶんぶんと首を左右に振り続けていると、

「そんなことはさせない」

立ち上がり、アズフェルトが一步踏み込んできた。

本音

「確かに俺は君をいのように利用した。だけど、君のことを差別するつもりも粗略に扱うつもりもない。危害を加えるような真似も絶対にさせない……！」

力強い口調と掴みかかるような眼差しにどきつとした。

「何の関係もない君を巻き込んで、本当に悪いことをしたと思ってる。面目を保つことで頭が一杯で他に手段がなかったとはいえ……借金返済を餌に君を買っなんて、卑劣だった」

すまない、とアズフェルトが頭を下げた。意表をつかれ、シェイラは言葉につまる。

「俺を怒っているのは当然だ。君の意思を無視して乱暴なことをした上に、理不尽な態度ばかりとって混乱させて……俺にはそんな資格ありはしないのに」

夕陽のせいで紫にも見える両目を伏せ、アズフェルトが悔しげに奥歯を噛みしめる。その沈痛な面持ちに戸惑いの波が押し寄せた。

「どうして急に謝るの？ あなたは侯爵様よ。私なんかよりずっと偉いし力もある」

「そんなことは関係ない。言っただろう、偶然生まれたただだと。俺の持つ財産も名誉も先代たちの功績があつてのことで、俺のものじゃない」

ふらりとシェイラのそばから離れ、マラウクはあずまやの円柱に手をついた。

「皆が俺を敬うのは、俺が偉大な聖騎士の子孫で、有能だった父の息子だからだ。そうでなければこんな青二才にかまうものか。……偉大な名前があるだけで俺には何もない。ウィルやスミッティの手助けがなければ自分を守ることもできない。大公は俺を買ってくれてはいるが、騎士団長になったといっても机上での処理に手一杯でとても規律改正なんて。シヴォーレンの屋敷だって母に任せきりだ。

でも俺はこのシンクレア家の誇りを守る義務がある。だから必死にしがみついているしかない。……なんて、こんなこと言ってもしょうがないな」

アズフェルトの背中が自嘲に揺れた。

——この人もこんな風に気弱になるのね。

使用人や貴族たちの話の中では、アズフェルトは非の打ちどころのない貴公子だった。もちろんシェイラも、違う世界に住む遠い存在だと思っていた。

でも本当はそうじゃないのだ。

高貴な家に生まれた者には特権と同時に、重大な責任や義務が課せられる。だから彼は完璧な貴公子でなければいけないのだらう。

でもそううまくはいかない。その背に背負う荷物が大きい分、苦労は相当なものだ。

きっと今のは彼の本音だ。

完璧さを願い、だが現実の厳しさに苦悩し煩悶を繰り返す、どこにでもいる普通の若者の声だ。

「ねえ、どうして悲観的に考えるの？」

夕影のにじむ後姿にシェイラは問いかけた。

「これから実現していけばいいじゃない。願いも夢も、思うだけじゃ叶わないもの」

アズフェルトが驚いたようにこちらを向いた。

「死ぬのを待つだけのよばよばのおじいさんだったら話は別よ。でもあなたはまだこれからだし、団長にだってなったばかり。思った通りにいくことなんてほんの一握りしかこの世界にはない。けど、だからっだからみんな頑張るのよ。どうなるかわからなくても、自分を信じて。……ねえ、ヒースって知ってる？」

赤く眩しい夕景にシェイラは目を向けた。

「空麦っていう作物で、ハートランドでは生産がさかんなの。柔ら

かい穂先をお粥にして食べたり、葉や茎は干して家畜の餌にするんだけど、夏には大人の背も追い越すほどぐんぐん伸びる。だから空麦っていうの。ハートランドは夏にはよく雷雨や嵐がきてね、そのたびに畑はめちゃくちゃ。もちろんのっぽのヒースもくたつと倒れちゃう。でもね——ヒースだけは自分の力で起き上がるの。何度雨風に打たれて倒れても、絶対に負けないの。太陽が出れば必ず立ち上がる、すごく強い作物なのよ」

シェイラは目を閉じた。まぶたの裏に故郷の夕暮れが浮かびあがる。

「……辛いことや悲しいことがあると、私はいつもヒースを思い出すの。負けないで頑張ろう。ヒースみたいに、くじけずに立ち上がろうって」

どこまでも続くヒース畑、吹き抜ける熱い夏の夕風、濃い緑の匂い……。懐かしく、でもとても鮮明に思い出せる故郷の日々。——いつか帰りたい場所。

「だから両親を亡くして一人ぼっちになっても、やってこられた」
最後に父と母が微笑む姿を見て、シェイラは目を開けた。

黄昏に馳せる思い

「……君は強いな」

独り言のようにアズフェルトが言った。

「強くなかないわ……何度もくじけそうだったもの。こんなんじや牧場を買い戻すなんて無理かなーって」

「牧場？ 借金のカタに取られたっていう君の家か？」

「そう。あのね、いつかあの牧場を買い戻すのが私の夢なの。人形娼婦^ドになったのもそのため。一生かかっても無理かもしれないけど……」

アズフェルトに向かってシェイラは破顔した。

「ね、あなたの悩みとはだいぶ違うけど、私だってこんな大きな壁の前にいるのよ。どうしたらいいかなんてわからない。自分に何が出来るのかも。でも諦めないつもりよ。なのにあなたはもう弱腰？ それこそ侯爵様の名が泣くわよ」

アズフェルトの鼻先にシェイラは指を突き付けた。

「ていうか、あなた贅沢よ。大公の信頼を独り占めして、頼れる親友もいて、この家の人たちにも本当に好かれてる。さっき自分の持っている物は家名のおかげだって言ったけど、そんなことないわ。みんな本当にあなたが好きなのよ。それでも私、色々大変な目に遭ってきたせいで人を見る目はあるの。もつと自信持ちなさいよ。あなたはそのへんの甘ったれたお坊ちゃんたちとは違うわ。ちゃんと努力すること知ってるもの」

「……君は変わってるな」

ふっとアズフェルトが笑みをこぼした。

「口答えはするし、説教はするし……他の娼婦たちとは違う。君に出会う前、何度かこの仕事を任せられる者を探しに花街へ出向いた。でも俺が貴族だとわかったら、一人残らず色目を使ってきた。正面から遠慮なくぶつかってきたのは君がはじめてだ」

ほめられているのか、けなされているのか。複雑な気持ちでシェイラは肩を震わせるアズフェルトを見た。

「これが私よ。□うるさくてかわいげがなくて……でもエサに釣られたのは私も同じよ」

肩をすくめ、ぺろりと舌を出す。「借金返済の条件に目がくらんだもの」

「……そうだとしても、君は——やさしいよ。それに誠実だ。昨日も立派に婚約者のふりをこなしてくれた。見事だったよ、誰も疑いもしなかった。感謝してる」

「別に」マライウクの真摯な眼差しに、シェイラはたちまち決まりが悪くなる。

「あれは……自分のためにやったのよその、あなたを見返してやろうと思つて」

「はは、そうか。でもそれでも構わない。ありがとう……さっきの励ましも」

うれしかった、と言われ少し照れる。夕陽が染み込んだようにほんわり胸が温かくなった。

「君にはたくさん借りが出来た。でも俺は……君に取り返しのないことを。どうやって償えばいいのかわからないが、出来る限りのことはしたいと思つてる」

「あ、あの。そのことなんだけど——」

シェイラは目を泳がせた。すっかり忘れていたが、言っておかねばなるまい。

「私、感情が高ぶつててだいぶん大げさに言っちゃったみたいなんだけど……あの夜私たちは一線越えたりとかは……してないの」

「……え？」

「その……確かにキスはされたけど……それだけだったの。その後私逃げちゃったから。だからなんていうか……おあいこ？ 私もあなたを思い切り引っぱたいちゃったから」

ぽかんと口を開けたままアズフェルトが固まる。そして空気が抜

けたようにしゃがみ込んだ。

「何も……なかった？」

「まあ、それ以上は」

「……そうか、ああ………よかった」

項垂れたまま、長い安堵のため息をアズフェルトが吐きだした。

——そりゃ、当然よね……。

間違いはなく、面目を保てたのだから。その反応になんともなくがっかりしていると、

「……君が無事で、本当によかった」

「え？」

しゃがんだまま、アズフェルトが顔を浮かせた。

「君に一生の心の傷を与えてしまったのかと。……君が逃げてくれて本当によかった」

——もしかして、私の心配してたの？

自分のことでなく？

意外な反応に驚いていると、アズフェルトが立ち上がった。

「でも傷つけたことには変わらない。それについてはその、好きに罰してくれていい。煮るなり焼くなり、……出ていくならそれでも」
ぎくしゃくした声で同じ台詞を言われ、シェイラはたまらず笑い声を上げた。

「あなたマジメすぎ……！ 大丈夫、引き受けた以上最後までやるわ」

「……たくましいな」

「よく言われる。両親直伝よ。借金返済もかかってるし、頑張るわ。対価は仕事の出来で決まるんでしょう？」

ひとしきり笑って、シェイラはベンチに腰を下ろした。

「それに、あなたが守ってくれるんでしょう。騎士様？」

揺れていたマラウクの目に、確かな意志が戻った。

「……ああ、この命を賭けて」

左胸に右手を置き、アズフェルトが一つゆっくりと首肯する。
まるで永遠なる忠誠の誓いのような、神聖な響き。

なんだかどきどきしてきて、シェイラはとっさに遠くの空を見た。

「夕暮れって不思議ね」

金色から赤へ、そして夜の手前の紫へ。

気まぐれに変わる空の色は、羽化し続ける蝶のように見るたびに
美しくなっていく。

「……この時間が一番好きなんだ」

夕陽に染められたアズフェルトの長衣の裾がふわりと翻った。

「今日の出来事も景色も……全部やさしい色に染まって、今だけは
許される気がするんだ。

ありのままの自分でいてもいいと——」

眩い天空の瞳が今日の役目を終えて、ゆっくり瞼を閉じるまでの
わずかな間だけ。

「——あなたは、あなただわ」

いつだってそうあればいい。

光が消え、世界がゆっくりと閉じていく。

その中で、ひどく寂しげなアズフェルトの笑顔を見た気がした。

ふたりで朝食を

「……後頭部に覚えのないこぶが出来てるんだが」

翌朝、朝食の席でのアズフェルトの第一声に、シェイラは持ち上げかけた紅茶のカップをがしんと置いた。

「それを聞きたくて朝ごはんに誘ったの？ どうしてだか、ご自分の胸に聞いてみたら？」

窓の外に広がる青空と同じ色の瞳を釣り上げ、シェイラは砂糖のポットを掴んで手元に引き寄せた。

「……聞きたいんだが覚えてない」

「そうでしょうね。あの後あなた、月をみちゃったから」

山盛り一杯砂糖をすくったスプーンをシェイラは紅茶に落とした。夕陽が落ちた時に気付くべきだった。なんで忘れていたんだろう。昨夕、暗くなった直後アズフェルトに例の“変化”が起こり――押し倒されそうになった。

なんとか突き飛ばし難を逃れたが、はずみでアズフェルトは円柱に頭をぶつけて気を失った。たんこぶはその時の記念である。

「なんでお酒を飲んでおかなかったのよ。何が細心の注意よ、あなたダメダメじゃない！」

「仕方ないだろ！ まさか君が来るとは思わなかったし、日没前には戻るつもりだったんだ」

その後一目散にシェイラは逃げ、スミッティに事情を説明した。おそらく彼がその後アズフェルトの介抱をしてくれたのだろう。

「だからって不用心すぎるわよ。間違いを犯したいの！？」

せつかく少し見直したところだったのに、なんてマヌケなんだろう。

ああ、そのきれいな顔にジャムを塗りたくってやりたい。でもこんなにおいしいアプリコットジャムを無駄には出来ない。このふわ

ふわの白パンによく合うのだ——そう思い止まる。

「もつとしつかりしてもらわなきゃ困るわ。今度やったら出て行きますからね」

強気のシェイラに使用人たちがはらはらしながらこつちを見ている。かまわず二杯、三杯と紅茶に砂糖を入れた。

「……悪かった、次は気をつけるよ。——ところで、その砂糖全部入れるのか？」

四杯目にとりかかろうとした手を止め、シェイラは上目遣いにアズフェルトを見た。

「せっかくの上等な紅茶を砂糖水にする気か？」

「だ、だって……甘いとおいしいんだもの」

慌ててポットを閉め、押し戻す。きまりの悪さに顔が熱くなった。砂糖は平民には大変高価な代物なのだ。商人の集まるヴィクトリアでは多少安価になっているようだが、平民にとってはまだまだ贅沢品。娼館では客に紅茶をふるまうのだが、娼婦たちは手をつけるのは禁じられていた。

「……甘いものならそこにくるみのタルトとクリームパイがあるぞ」

「違うの、お菓子とはまた別なのよ！」シェイラはぶんぶんと首を横に振る。

「この積りたての雪みたいな白い小山を見てるとね……抑えがたい衝動に駆られるの。さらさらーってスプーンからこぼれる感覚がやみつきになるっていうか……」

「——君は——……変なやつだな」

「わ、悪かったわね！　あなただって十分変よ。血を砂糖水にしたいわけっ？」

朝食だというのにパイやマフィンの山がずらりと並ぶ食卓の前でシェイラは両手を広げた。そこへサラが小さなカゴを持ってやって来た。

「旦那様、今朝はぜひお召し上がりいただきたいものが」

そうアズフェルトに差し出したカゴの中身を見て、シェイラは悲

鳴に近い声を上げた。

「ちょ、ちよつとサラ！　だめよ、それは――」

提案

「なんだ？」きれいに切って並べてある焼き菓子のアズフェルトが一切れとり、止める間もなくぱくりと一口食べた。

「……うまい。でも味わったことのない菓子だな。これはどこの店のものだ？」

「シェイラ様がお作りになったんです。離れのお庭になっていたイルベリーを使って。わたし、イルベリーが食べられるなんて知らなくて最初はびっくりしましたけど、コックたちも大絶賛で。せっかくなので旦那様にもと思ひまして」

にこにことサラが説明する。床に穴を掘って入ってしまいたいくらいの恥ずかしさに、シェイラは両手で頬を押さえた。

「これを君が？」

「う……。か、勝手にごめんなさい。でもサラもみんなもイルベリーを食べたことないって言うから、庭師さんに許可をもらって採ってきたの。それで調理場のすみっこを借りて作ってみたんだけど」

イルベリーのケーキは母がよく作ってくれた思い出のお菓子だ。

春になると近くの森は自生するイルベリーの甘い香りで満たされる。一見赤くかわいらしい果実は甘そうなのだが、そのままでは酸っぱくて食べられない。だから観賞用だと思う人が多いのだが、煮詰めると甘みがでて香りもよくタルトやケーキによく合うのだ。

「でもそんな質素なもの、都の人は食べないわよね。あなたなんて特に……。気を遣わなくていいの、無理しないで！ 口に合わなくて当然だからっ」

この屋敷のコックの腕は超一流だ。毎日出される食事やデザートはどれも豪華でほつたが落ちそうなほどおいしい。それに引き換え自分のケーキなんて、見た目も粗末で味気ない。

「そんなことない、すごくいい味だ。もう少しもらってもいいか？」だが意外にもアズフェルトは気に入った様子で、サラに数枚取り

分けさせた。

「うん、うまい。あつさりとしてて甘みもちょうどいい。君は料理上手なんだな」

「そ、そう？　ほんとに？」

率直なほめ言葉に、シェイラは素直にうれしくなる。口に運びつつ、アズフェルトは食堂の端に立っているスミッティを呼んだ。

「今日はもうこれで十分だ。他のものはいつもの場所へ届けてくれ。そう命じ、手つかずのままのタルトやパイを下げさせる。」

「えっ、もう食べないの？　せつかく作ってくれたのに」

「ああ、違うよ。救護院への差し入れにするんだ」

救護院とは孤児や貧困にあえぐ人々を保護する施設のことだ。

同じ下層階級の中でも裕福な者もいれば困窮する者もいる。大きな都では特に貧富の差は激しい。そのため、そういった設備はあちこちに設けられている。

「差し入れって、慈善活動ってこと？」

救護院の財政は貴族たちの寄付から成り立っている。

上層界では、慈善活動は夜会やダンスに並んで人気のある趣味の一つである。人気の理由はただ一つ、売名のためだ。優越主義が浸透した貴族社会では人気の獲得が何よりも重要である。そのため多額の寄付を始め、孤児たちを招いての慈善パーティなど熱心に催しているらしい。

「そこまでのことじゃない。毎日子供たちにおやつを届けさせてるだけだよ」

「じゃあもしかして、職人を呼んでたくさん作らせてるのは子供たちのためのの？」

「そうだが……まさか、全部俺が一人で食べてると思ってたのか？」
こくりと頷いたシェイラに「俺の分はホロヴァだけだ」とアズフェルトが口を曲げる。そこへ銀のトレーを片手にスミッティが戻って来た。

「失礼致します、旦那様。昨日、シヴオーレンの大奥様よりお手紙

が」

トレーの上には薔薇の封蝋のついた封筒が載っている。アズフェルトの顔色が曇った。

「……そうか。いい、いつもの場所にしまっておいてくれ」

そう言って下げさせる。不審に思ってシェイラは訊いた。

「読まないの？　大奥様って……あなたのお母さんでしょ？」

「構わない。どうせいつも内容は同じだ。バラが咲き始めたとか、天気がいいとか。わざわざ見るまでもないさ」

「そうだとしても……せつかく送ってくれたのに」

実の母親に対してずいぶんと冷たい反応だ。ずっと離れて暮らしていると感じたが、仲が悪いのだろうか。

手紙が載ったトレーをどこかに持っていくスミッティの後ろ姿を見送りながら、シェイラが思わず呟くと、

「いいんだ、別に。君には関係ないだろう。放っておいてくれ」避けるように強い口調でこの話題をはねのけ、アズフェルトはナフキンで口元を拭いた。

「それより、どこか行きたいところはないか？」

「え？」

行きたいところ？　何のことだろうときよんとしているとアズフェルトがコホンと咳払いをした。

「あー、今日はじつは非番なんだ。それでその——いろいろ大変な目に遭わせた罪滅ぼしというか、愚痴を聞かせたお詫びというか……気分転換に観光でもどうかと。ほら、ヴィクトリアのことをよく知らないって言ってただろう。まあ、よければだが」

「ほんと!？」

その提案にシェイラは瞳を輝かせた。真っ先にある場所が脳裏に浮かび上がる。うれしいチャンス到来に思わず「はいっ」と手を挙げた。

「あるある、行きたい場所!　一度近くで見てみたいと思っていたの」

光の聖堂

陽が昇り始めた青空に、鐘の音が高らかに鳴り響く。

上層区と下層区に挟まれた商業区オーレーンの中心街は、行き交う人々や馬車で溢れていた。参拝客で賑わう大通りには、躍動感溢れる六体の巨像が立ち並んでいる。女神ティアナの守護天使たちが見ているのは、その先にある荘厳な石造りの大聖堂。蒼穹に向かってそびえ立つ二つの尖塔の先では、祈りの時を知らせる金色の鐘が軽やかに揺れている。

「わあ……！」

大聖堂を仰ぎ見て、シェイラは思わず息をのんだ。

まず目に飛び込んだのは、大輪の花を思わせるファサード上部の大きな薔薇窓だった。アーチ装飾や精緻な彫刻が施された控壁や柱も素晴らしく、どこを見てもその造形美に見とれてしまう。

「おい、ひっくり返るなよ」

アズフェルトの手に背中を支えられ、ようやく我に戻る。背中に後頭部がつきそうなくらい反っていた首を元の位置に戻し、ずり落ちそうになったコサージュつきの帽子を直す。上目遣いに見上げれば、寄り添う相手は呆れ顔だった。

「バカみたいに大口を開けてたぞ」

「ご、ごめんなさい。でもあんまり大きくてきれいだから。いつも鐘の音は聞いていたけど、こうして間近で見るのは初めてなの。一度来てみたいと思ってたのよ」

大聖堂を見ずに帰ることなかれ。ヴィクトリアを訪れたことのある者がよく言う決まり文句である。

女神ティアナの信者にとってここは聖地であり、憧れの場所なのだ。

『本当に女神さまが降り立つように美しくて、心が透き通る不思議な場所なのよ』

昔母がそう教えてくれたのを覚えている。ヴィクトリアは父と母が新婚旅行で訪れた場所なのだという。その時訪れたこの大聖堂の美しさは何年たっても忘れられないと話していた。だからいつか自分も見てみたいと思っていたのだ。

でも籠の鳥である人形娼婦の時には無理な話だった。借金を返して自由の身になったら必ず訪れようと決めていた。きつと気が遠くなるほど先の話だろうと思っていたのに、こんなに早く叶うなんて——うれしい。

白いレース手袋をはめた手を胸に当て、感動をかみしめる。父や母もこんな風に見上げたのだろうか。そう思うと胸がいっぱいになった。

「ロザリウムで最も古く大きな聖堂だ。ヴィクトリアの象徴であり、憩いの場でもある。日に一度は祈りを捧げるのが騎士や住人の日課だ。——どうした？」

「え？ あ、ううん、なんでもない！ 本当にすごいなあと思って、なんか感動しちゃった」

覗き込んできたアズフェルトに見られまいと、シェイラは慌てて熱くなった目頭を拭った。笑顔を作って誤魔化し、「早く中が見たいわ」と急かす。

「ずいぶんはしゃいでるな。まあ楽しそうで何よりだが。じゃあ行こうか」

アズフェルトが差し出した腕をシェイラは取り、階段を上っていく。前方へせり出すように設計されたアーチ型の入口の両側の柱には、今にも飛び立ちそうな躍動感ある天使の浮き彫り。大きく開放された扉の中へ二人は並んで足を踏み入れた。

巨大な円柱の立ち並ぶ聖堂内は明るく広々とした空間だった。

身廊の床には青い光が大きな花模様を描き出している。薔薇窓からの光だ。陽に透けて浮き上がる鮮やかな青は、ため息が出るほど

美しい。

アーチ型の天井は目が眩むほどに高い。小さな靴音さえもすべて吸い込まれ、神聖な吐息となつて降り注いでくる。

通路の両側に設けられた細長い椅子では、身なりのいい男女や老人、商人や子供をおぶつた女性など様々な人々が熱心に祈っている。身分の隔てなく開放されている大聖堂の中では、格差など存在しないかのような自由で穏やかな時間が流れていた。

「みんな熱心なのね」

「大公の影響さ。政務の合間を縫つて頻繁に参拝するほど信仰に厚い。君だつてここへ来る前は礼拝には毎日行つていたのでは？」

「うん……まあ」当然のように言われてシェイラは口ごもる。

確かに故郷の街でも礼拝堂はあつた。だが月に二、三度行けばいい方で、熱心に祈つていたわけでもない。昔からじつと座っているのは苦手で、考えるより行動する方が好きなのだ。

「そういえば、あなたのお屋敷にも礼拝堂があるわよね？ 家でも祈るの？」

「あれは大天使シリエルの守礼堂だ。彼の天使はシヴオーレンでは守り神のような存在でね。危機が訪れると姿を現し救いを与えるという言い伝えもある。その加護にあずかれるようにと、祖父がミレン湖の聖堂から聖遺物の一部を移させたんだ。何だかよくわからない錆びた棒だけだな。でも通常はこの大聖堂に参拝する。我が守護天使に見えることも出来る」

光に満ちた身廊を進んでいくと、眩いステンドグラスに囲まれた内陣へと辿り着いた。美しい女神の傍らにあるのは最後の守護天使。八人の天使を導く大天使シリエルの像だ。

小さな翳り

「わあ……本当にステキ。ねえ、貴族の結婚式はここで行うのが伝統なんですよ！？　あなたのご両親もそうだった？」

「ああ、そう聞いている」

「へえ……ここで永遠の愛を誓うのね」

なんてロマンチック。女神の前で、その使徒たちに囲まれて祝福を受けるなんて。

想像しただけで、うつとりしてため息が出そうだ。

「じゃあいつかあなたも式を挙げるのね」

本物の婚約者と。チラリとアズフェルトの横顔を見上げる。

いつか彼の隣に並ぶのは、いったいどんな女性だろうか。

自分のような田舎娘ではなく、きつと高貴で気品あふれる本物のご令嬢に違いない。誰であれ、その人とはとてもなく幸運ね——そんなことを思っていると、

「いや、それはないな。俺は結婚はしないから」

「え？」

七色の光が交錯する祭壇の前に跪き、アズフェルトが頭を垂れる。一瞬ばかんとしたシェイラも慌ててそれに倣い、両手を組んで目を閉じた。

——今のつて、どういうこと？

聞き間違い……じゃないと思う。結婚しないって言った？

どうしてだろう。彼のような高位の貴族にとって『結婚』は重要事項のはずだ。家名を絶やさぬために、地位を確固たるものにするために、ふさわしい血筋の花嫁を迎えるのは絶対的に必要なのでは？　何だか、気になる。

冗談にしては真面目な声だったような——

でも神聖な祈りの途中で問いただすわけにもいかず祈るふりをしている、後ろの方でささやき声がした。

「ねえ、あれアズフェルト様じゃありませんこと？」

シェイラはうつすらと目を開けた。

「まあほんと。今日も素敵だわ。お帰りの時に声をかけてみましょうか」

「でも隣にいる方って例の——」

ひそひそと、あちこちから小さな声が聞こえてくる。どうやらアズフェルトの顔見知りのご婦人たちらしい。

今日は非番のためアズフェルトは騎士団の礼服でなく、落ち着いたダークブラウンのコートとズボン姿だ。それでも簡単に人目をひくのはさすが“都中の女性の憧れの的”だけある。

声には気付いていない様子で立ち上がり、女神像に向かってアズフェルトが騎士の敬礼を送る。それに倣い、まったく祈りどころではなかったシェイラも両手を解いて立ち上がった。

「シンクレア総長！」

再び並んで入口へと引き返しかけた時、二人の若い男が近寄って来た。

「おはようございます、総長も礼拝ですか？ お休みなのに早いですね」

屈託ない笑顔で青年らが挨拶してくる。どこかあどけなさの残るその顔からして、シェイラと同じような年頃だろう。真新しいロングコートの胸には薔薇の徽章が輝く。

「ああ、出かける前にと思っ。て。お前たちも早いな。今日は午後からじゃなかったか？」

「よくご存じですね、さすがだなあ。ええ、ちよつとこれから郊外の村へ。昨夜夜盗騒ぎがあったようで、様子を見に。レウエア指導官は必要ないと言っんですがやっぱり見過ごせなくて。まあ、僕ら

みたいな従騎士が行っても何の役にも立たないかもしれませんけど」
「そんなことはない、いい心がけだ。騎士団は民のためにある。どんなに小さな事件でも等閑視すべきじゃない。行って調べてきてくれ。後で報告を」

穏やかな表情で頷いたアズフェルトに「はい！」と青年たちが元気によく返事をする。そしてシェイラの方を見て互いに目配せし合った。

「あの、総長。そちらの方はもしかして——」

「ああ、紹介しよう。シェイラ・アルニー嬢。俺の婚約者だ」

肩を抱き寄せられ、シェイラはお嬢様の微笑みを満面に貼りつけた。

「はじめまして騎士様方。お勤めご苦労さまでございます」

「いやあ、騎士様なんて」恐縮した様子で青年たちが顔を見合わせる。

「僕らはまだ駆け出しですよ！　いつか人々を守る立派な騎士になりたいと思っではいますが。でも総長さすがですね。こんなきれいなご令嬢とご婚約なんて。騎士としても尊敬してますが、男としてもうらやましい限りですよ」

見習い騎士たちの態度は実にくだけた感じだが、アズフェルトは気にしている様子はない。むしろそれを快く受け入れ親しんでいるようだ。

「そうだよ、俺は幸運だ。君のような人に出会えて、一生そばにいてももらえるなんて」

鮮やかな笑顔に見つめられ、不本意にもどきつとする。余計なことを考えそうになるのを、シェイラは必死に振り払った。

「ひゃー、言ってくれますね！　どうやら僕らはお邪魔のようだ」

「ああ、これ以上のろけられる前に退散しよう。では失礼します。よい休日を！」

気持ちのいい一礼をして、青年たちは祭壇へ向かって行った。

「去年入団したばかりの従騎士たちだよ」

再び歩きながら小声でアズフェルトが言った。

「まだ指導官の準騎士のもとで訓練中だがよくやってくれている」

「……へえ。まじめな人もいるのね、騎士団って……と」

しまったと口元を押さえる。アズフェルトがくすりと笑んだ。

「いいさ。巷で騎士団が何て言われているかオレも知ってる。不名誉極まりないが、事実剣を下げ印を胸に掲げれば一人前の騎士だと思いついてる呆れた連中も多い。貴族の子弟たちはみな、地位や財産のあることで己が偉大になったと勘違いしている。その中で彼らのように志の高い者たちは救いだよ」

「……ずいぶん辛口ね。あなただって貴族なのに」

まるで他人事のように批難するアズフェルトを、シェイラは不思議に思う。最高位の称号を持つ貴族の当主とは思えない陰のある口調だった。

「……そうだな」

聖堂の陰影が映る横顔に、ふと暗い色が過った気がした。だが外に出た時にはもうその相は消えていた。

「さて、次はどうする？ 他に行きたいところはあるか？」

見間違いだろうか。さつき結婚のことを言った時も同じような表情をしたような気がしたのだが。

「ええと……そうね。せっかくだから色々見て回りたいけれど」

気になったが口には出さずにシェイラは話を合わせた。

たぶん触れない方がいいことだろう。それよりも今は観光を楽しもう。せっかくの機会なのだから。

「ちよつと待つて。昨夜色々考えたの」

さっそく気分を切り替えて、シェイラは昨夜ベッドの中で書きだした『見たいものリスト』をレースのハンドバッグから出そうとした。——その時、

「何をする！ 汚い手で触るな！」

踏みにじられた花

近くで怒声が響いた。

広場の噴水のそばで、貴族らしき身なりの男が手に持つステッキを振り回している。

——あ………！

杖先が傍にいた少女の頬を弾いた。少女が石畳に倒れる。彼女の手から花かごが離れ、白い小さな花が辺りに舞い散った。

「そんな雑草なんていらんわ！ 薄汚い売婦め！ ここはお前のようなドブネズミが来ていい場所じゃない。さつさと消えろ！」

聖堂を行き来する人々や馬車の往来があるのにも関わらず、男はわざと人目を引きつけるように大声で怒鳴りつけている。そしてさらに力の差を誇示するかのように、落ちている花を次々と踏み潰し始めた。

「ひどい……何よ、あの男………！」

全身がかつと熱くなるのをシェイラは感じた。

「いやだわ、見て。あれ私娼街の花売りよ。薄汚い格好」

「それって花を売りながら客を娼館に引いていくっていうあれ？」

あんなに小さいのに卑しいこと」

周囲でひそひそと囁く声が聞こえる。

誰も止めようとしらない。皆見ないふりをして、蔑むような目で蹲る少女を一瞥して、非情にも通り過ぎて行く。

——許せない………！

あの花一つが、彼女にとって生きるためにどれほど大切なものか——ぎゅっと手を握りしめシェイラが石段を駆け降りようとすると、

「——君はここにいてくれ」

やんわりと片手でそれを止め、アズフェルトは聖堂の石段を降りた。そしてまっすぐに男の元へ行くと、凜とした声を響かせた。

「その足をどける」

周囲のざわめきが変わった。

男がなんだ？というようにアズフェルトを見た。

流行りの服や装飾品で全身を飾り立てた出で立ちは、新興貴族の特徴そのものでなんとも悪趣味だ。

それに引き換え控え目な装いのアズフェルトを格下と見たらしく、男は尊大な態度に出た。

「なんだお前……今このおれに命令したのか？」

「そうだ。ここは女神を奉る神聖なる場所だ。その前で無法な振る舞いは謹んで頂こう」

「なんだと？ 貴様偉そうに、何様のつもりだっ！」

男がアズフェルトにステッキの先を突きつけた。その先端部を——アズフェルトは瞬き一つせず、瞬時に片手で掴んだ。

「女神の御心に従い、民に忠義を尽くす誓いを立てた者だ。——ここはすべての民に等しく開かれた祈りの場。だが暴虐な行為で聖域を汚す者に足を踏み入れる資格はない。立ち去るのは彼女ではない——貴殿の方だ」

男を見据えたまま、アズフェルトは強い信念を帯びた声音で迫る。ぐぐぐ、と杖の先が押し下げられていく。その気迫に圧され、男が一步後ろに下がった。

「な、なんだよ……このガキが汚れた手で服を——ちっ……！」

気まずそうに舌打ちをして男はその場を立ち去った。

シェイラは急いで階段を降り、アズフェルトに駆け寄った。

「大丈夫!？」

遠巻きに眺めていた人の群れが分裂していく。何事もなかったように往来が動き出した。

「ああ、俺は平気だ。——大丈夫かい？」

その場にすつと膝を折り、花をかき集めていた少女にアズフェルトが声をかけた。

びくつと肩を震わせ、少女が恐る恐る顔を上げる。まだ十一二歳ほどの幼い少女だった。

痩せこけた顔は青白く、健康的とはいえない。アズフェルトをとらえたガラス玉のような大きな薄青の瞳が怯えて揺らいだのに気付いて、シェイラは少女の隣にしゃがみ込んだ。

「あーあ……せつかくのかわいい花が台無しになっちゃったわね」
につこりと微笑みかけ、踏まれて首の折れた花をそつと拾い上げる。

「……女神様にあげるお花を摘んできたのよね？」

はい、と差し出され少女がかすかに目を見張った。

彼女のような”花売り”は白昼堂々、このような目立つ大通りで客引きはしない。取り締まりの警邏の目を避け、夕暮れ頃から花街の路地裏にひっそりと立つのが常だ。きつと勇気を振り絞ってやってきたに違いない。

「中に入らないの？　女神様にお祈りに来たんでしょう」

シェイラの問いかけに、少女は頭巾で覆った頭をぶんぶん横に振った。

「あ、あたしなんか……あんなきれいな場所に入れないから……ふさわしくないから、いいんです」

カゴを持って立ち上がり、少女はシェイラにおずおずと花を差し

出した。

「あの、これ……もらってください。目立たないけど、フルーウェル“祝福”^{祝福}という名前の花なんです」

そしてアズフェルトを見上げ、気恥しそうに小さく笑った。

「き、騎士様……ありがとうございました」

お礼と一緒にちょこんと膝を折ると、少女はぱつと走り去った。

「……彼女は」

人混みの中に消えて行くその姿を見つめたまま、アズフェルトが呟く。シェイラは立ち上がった。

「あの子は“花売り”よ。花街には一人や二人は必ずいるわ。花を買ったお客を娼館に連れて行くのが仕事だけど……時には相手をしなきゃならないこともある」

「あんなに幼い子が？ ……体を売るといのか」

「そうよ、生きていくために」

手の中の小さな花にシェイラは視線を落とした。

——生きていくため、貧しい者は時には自分自身を犠牲にしなければならぬ。それが唯一の持ち物だから。

「あなたやお金持ちの人にはわからないかもしれないけど……そうやって自分のために自分を削らなければならぬ人はたくさんいるの。この美しい都の片隅に——この国のあちこちに」

そつと、背後に聳え立つ大聖堂を振り仰ぐ。自由と平等を掲げた白亜の殿堂——本当の意味でその加護を受け取ることの出来る者がほんの一握りであることを、女神はご存じなのだろうか。

「……そうか。俺は、何も知らないな」

「え？」

アズフェルトの弦きが聞こえた時、広場に再び鐘の音が鳴り響いた。

鮮やかさを増していく青空から、澄んだ音色が降り注いでくる。陽射しにきらめく噴水が一際高く噴き上がり、ダイヤのようにきらきらと水が弾けた。

「きっとまだ……何も見えていないのかもしれない」

同じ方向を見つめたままのアズフェルトの横顔は、大きな衝撃を受けた後のように悄然としていた。憂いに沈むその青い瞳が何を求めているか——シェイラは直感的に閃いた。

「ねえ、じゃあ——見に行く？」

アズフェルトの鼻先を小さな花でちゃんと突き、にっこりと笑う。

「見に行く？　あなたがまだ見えていないものを」

大好きな場所

少女にもらった花を女神の聖壇に捧げてから、シェイラとアズフェルトはヴィクトリアの中心街であるオーレーンを後にし花街のあるクレ・マリアへ向かった。

クレ・マリアには花街の他に名物の通りが二つある。

一つは庶民の台所と呼ばれる青果市場エルム・ガーデンのあるラトリー・レーン。そしてもう一つはロザリアム各地から集まった名産品を扱う露店のひしめくアデル・レーンだ。

「奥さん、安くしとくよ、ちょっと寄ってきな!」

「パドルフィールド産の新鮮な果物だよ。甘くておいしいよ!」

「メンフィスから入荷したレースはいかが?」

「きれいなバラはどう? 女神様の捧げ物にぴったりだよ」

二つの通りが交差するクレ・マリアの中心部では明るい売り子の声が次々に飛び交っている。昼前の市場通りには人が溢れ、熱気と活気に満ちあふれていた。

「すごい人だな……まるで別の街にでも来たみたいだ」

買い物客でひしめき合う通りをアズフェルトが驚いた様子で見回している。

はやる気持ちを抑えて、シェイラは胸一杯に息を吸い込んだ。

優しい花の匂い、甘酸っぱい果物の匂い、甘いお菓子の香ばしいパンの匂い……混ざり合うたくさんの匂いが早くおいでと誘いかけ

てくる。

元気な売り子の声、買い物客の賑やかなおしゃべり、すべての音が心を躍らせる。そうまるで音楽みたいに――。

華やかな夜会の演奏も素敵だけど、自然に調和しあう生きている音こそ本当に人をわくわくさせるものだ。

「あー、生きてるって感じ！」

思わず声を上げてから、シェイラははっとして隣のアズフェルトを見上げた。

「あ……ごめんなさい、つい。花街にいた時は外に出してもらえなかったから……うれしくて。こういうところは初めて？」

まずい。

危うく町娘返りするところだった。はしゃぐ気持ちを慌ててしまいいこむ。

「巡回で近くを通りかかったことはあるが、こうして実際に見て回るのは初めてだ。君はこういうところが好きなのか？」

「ええ、大好き！ 私の故郷の街でも時々大きな市場が開かれるんだけど、その時はお祭りみたいに賑やかだった。よく両親と出かけたわ。普段は贅沢はしないんだけどその時はおこづかいがもらえて……あっ！」

鼻先をふわりとかすめた甘い香りにぱっと顔を輝かせ、シェイラは近くの屋台に駆け寄った。

「ヌーフだわ、なつかしい！」

店先の大きなカゴの中には、茶色い粉のふりかかった揚げ菓子がこんもりと盛られている。ほかほかと上がる湯気と香ばしい香りに昔の思い出が呼び起こされる。

「へえ、これはヌーフっていつのか？」

「そうよ。黒パンを揚げてきび砂糖をふりかけてるの。空麦の収穫

祭の時に作るお祝い用のお菓子。それとはちょっと形が違うけど……
……すっごくおいしいのよ」

普段お菓子なんて滅多に食べられなかったけれど、年に一度の収穫祭の時だけは子供たちは心ゆくまでヌーフを頬張るものだった。

市場が開かれる時も時々売られていて、それを見つけた時は両親にせがんで買ってもらったのを思い出す。

「食べたいのか？」

隣からくすりと小さく笑う声がして、シェイラは籠の中を物欲しそうにじーっと見つめていた自分に気付いた。

「え、えつと、ちょっと昔を思い出しちゃって」

「買ってやるよ。いくつ食べるんだ？」

「そ、そんなに何個も食べないわよ失礼ね。おじさん、二つちょうだい。砂糖たっぷりかけてね！」

「あいよ。お、お嬢さん美人だねえ。一つおまけしといてやるよ」

「ほんと？　ありがとう、じゃあ大きいのにしてね！」

——ああ、こういうやりとりも久しぶり！

揚げたてのヌーフが三つ入った包みを受け取ってにんまりしつつ、シェイラは懷から金貨を取り出そうとしているアズフェルトを「待つて」と止めた。

「ここは案内役の私のおごり」

バッグから小さな銅貨を三枚出して店主に渡し、シェイラはアズフェルトの腕を引っ張って店を離れた。

「気持ちはいがたいが、ご婦人に払わせるのは……」

「男の沽券に関わる？　いいじゃない、そんなつまらないルールなんて。それに金貨なんてちらつかせちゃダメよ。こういうところは人も多い分治安も悪いから、どこでスリが狙ってるかわからないの。そのため目立つ飾りははずしてきたんだから」

小声で囁いて、シェイラはとりあえず安全確認のため周囲を見回

した。

高価な装飾品の類は用心のため馬車に置いてきたとはいえ、物腰や言葉遣いからアズフェルトが上流階級の者だというのは容易に知れてしまっただろう。ただでさえこの侯爵様は人目を引く容姿をしているのだ。用心に越したことはない。

「そうか、それは軽率だった。すまない」

神妙な顔つきでアズフェルトが謝る。動揺をちらつかせるその様子に、

——さつきと同じ人とは思えないわね。

シェイラは吹き出しそうになるのをこらえた。

少女を助けたアズフェルトは、まるで物語に出てくる王子様みたいだった。でも今は叱られてしゅんとする子供みたいで——

——なんていうか……かわいい？

放っておけないというか。手のかかる弟みたい。そんな風に言ったらきつとシヨックを受けるだろうけれど。

「知らなくてもしょうがないわ。よし、今日は庶民代表として、私が市場の楽しみ方を教えてあげる！　まずは温かいうちにこれを食べましょ」

腕の中のヌーフの包みをちょっと上げて見せ、シェイラはにっこりと笑った。

心の影

「はい、どうぞ」

食べやすいように包み直したほかほかのヌーフをシェイラはアズフェルトに差し出した。

どこか座れる静かな場所はないかとシェイラはアズフェルトを連れ賑やかな市場通りから路地に入った。

その途中小さな廃屋の庭にちょうどよい木陰とベンチがあったので、そこでおやつ休憩をとることにした。

「うーん、これこれ！ 表がサクつで中がふわつとしてて……やっぱりヌーフは揚げたてが一番おいしい」

一口かじってシェイラは思わずにんまりと頬を押さえた。ヌーフを食べたのはいつぶりだろう。思い出に残っているままの素朴な味に心がほっこりと温かくなっていく。

「——本当だ、うまい。初めての食感だけど……いくつも食べたいなる気持ちがわかるな」

「でしょ？ このじゅわーっと口で溶ける甘さが幸せなの。あ、砂糖気をつけて」

ハンカチを取り出しシェイラはアズフェルトの襟もとにかかった砂糖をささっと払うように拭いた。

仕立てのいい服だから汚れたら大変だ。するとすぐ近くからくりと笑う声が落ちてきた。

「なんだか母親みたいだな」

少し目線を上げるとアズフェルトの整った顔が間近——シェイラは慌てて体を離れた。

「ご、ごめんなさい、つい！ お、大人なんだから自分でふけるわよね、あはは……」

心臓が飛び出しそうなのを笑って誤魔化し、シェイラは狭い木の

ベンチの端へささつとずれた。

——やだ、なんで急に意識してるんだか。

ヌーフをかじりながらちらつと横目でアズフェルトを盗み見る。
重なり合いそうなほどの距離にどきつとしてしまった。

アズフェルトがふいに見せる笑顔は——毒だ。危険だ。そんな風に思う。

今まで見た目に騙されて言い寄って来た男たちは何人かいたけれど、にっこり笑われても触れられても何とも思わなかったのに。

この人だけどうして違うんだろう？

——さすが魔女に気に入られるだけのことはあるのかも。

きつとシンクレア家の当主には、あらゆるものを引きつける引力のような特殊な何かが備わっているのだ。

妙に納得してしまって小さくうんうんと頷いていると、

「……こんな風にのんびりするの久しぶりだ」

樹冠のすき間からのぞく空を見上げながら、アズフェルトがふつと微笑んだ。「いや、今まで一度もなかったかもしれない」

「一度も？」

「うん。物心ついた頃から、次期当主としての勉強や社交界での作法の習得に忙しかったからな。朝昼晩家庭教師がつきつきりだった」「そんなに小さい時から!? 友達と遊んだりとかしなかったの?」「しなかったな。でも同じ階級の子供たちはみんなそうだったから、疑問は感じなかった」

「そうなの……」呆気にとられてシェイラは目を瞬いた。

何だか想像するだけで息がつまりそうな生活だ「普通だった」なんて信じられない。

その頃の自分といえば、野ウサギを追いまわしたり近所の子供た

ちと遊んだり、とにかく動き回っていた覚えがある。「もう少し女の子らしくしなさい！」と母に何度言われたことが……。

「でも家族と過ごす時間くらいはあったんでしょ？　どんな風だった？」

「……家族、か」細められたアズフェルトの目元がふつと翳った。

「正直、父や母との思い出は……何もないんだ」

「——え？」

「小さい頃から母とは離れて暮らしていたし、父も政務で家を空けることがほとんどだった。……父と母はあまりうまくいってなくて、たまに三人で顔を合わせても静かに食事をとるくらいで、会話らしい会話もしたことがなかった」

「そんな——」

まさかそんな答えが返ってくるとは思わなくて、シェイラは言葉に困った。いけないことを訊いてしまったのかもしれない。微笑みの消えたアズフェルトの横顔に焦りを覚える。

「だから君のように温かい家族の記憶は俺にはないんだ。未だに母とは疎遠だしね」

——ああ、だから——。

スミッティが持ってきた手紙をアズフェルトは読まなかったのだ。「お母様のこと……嫌いなの？」

たったひとりの母親なのに。

いったい何があったのだろう。気になって遠慮がちに尋ねると、

「……人をうまく愛せないのは、宿命なんだ。シンクレアの家に生まれた者の」

アズフェルトの青く澄んだ瞳がこちらを見た。

ふわりと吹いてきた風に梢が揺れた。

その影がうつろうアズフェルトの表情は、ひどく落ち着いて確信に満ちているように見えた。

「誰かを大切と思えば失うかもしれない。だから、なるべく関わらないよう避けて生きる。父も祖父もみなそうしてきた。その分持てるすべてをこの国のために捧げてきたんだ。……俺もそうやって生きようと思う」

——だから、結婚しないって言ったの？

誰かを愛することが弱みになってしまっから？

口に出そうとしたけれど、それを避けるようにアズフェルトはシェイラから視線を外してしまった。

——でもそんなのって。

寂しすぎる気がする。

大切な人がいるというのはとても幸せなことだ。たとえ側にいなくても、記憶や心の中だけの思い出になってしまったとしても——生きていくための大きな支えになってくれる。シェイラはそう思っていた。

すっかり冷めてしまったヌーフの包みを膝の上で握りしめ、シェイラはぽつりと言った。

「……ほんとにそれでいいのかな」

大切な人がいるというのはとても幸せなことだ。たとえ側にいなくても、記憶や心の中だけの思い出になってしまったとしても——

生きていくための大きな支えになってくれる。希望になってくれる。シェイラはそう思っている。

「ずっとそうだったからって……でもあなたがお父様たちと同じように生きる必要はないでしょう？ “宿命”なんて言葉で割り切っちゃっていいの？ 私は大切なものや人がいるから人は強くなれるんだと思う。だって——」

そこまで言ってしまったって、はっと口を押さえた。

——いけない、私偉そうに——。

つい口が滑ってしまった。アズフェルトの気持ちも考えず——。

呪いのことで彼が苦悩していることを知っているのに、これじゃまるで説教をしているように聞こえてしまう。

「あ、あの私——」

弁解しなきゃとシェイラは焦る。

アズフェルトは——人から愛される人だ。たぶん、そうあるべき人だ。彼のことを話す屋敷の人たちやミト、そしてさっき会った従騎士たちの顔を見ればよくわかる。だからそんな風に悲観的にならないでほしかった。そう伝えたかった。

見えない過去と、見えすぎる現実に惑わされずに。

「悪いな、暗い話して」だがシェイラが続きを言うより早く、アズフェルトはほがらかに話を打ち切った。

「食べ終わったらいいこうか。せっかくだから色々見てみたいんだ。

今日は案内してくれるんだろ？」

「あ……う、うん、そうね」

残りのヌーフを急いで食べ終え笑顔を返したが、もやもやした気持ちが残った。

お節介だと思われたかな。呆れられたかな。

そう心配になったけれど、たぶんもう何も言わない方がいいのだろう。

アズフェルトは穏やかな表情をしているけれど、唐突に話が終わった時、目の前でぴしゃりと扉を閉められたような気がした。それ

以上踏み込んでくるな——そう言われたように。

廃屋を後にして、二人は市場通りに戻った。

さっきのことは気になったが、詮索はしないことにした。アズフェルトもことのほか市場に興味を示しているようだし、せっかくの楽しい外出を暗い気分で台無しにしたくはない。

「そういえば……今日はちゃんと“気付け”は持ってるの？」

ふと大事なことを思い出し、シェイラはアズフェルトを見上げた。昼になったばかりで夕暮れまではまだまだだが、これだけは確認必須の重要事項だ。

「心配しなくてもちゃんと持ってるよ。これからまた満月がくるから」

上着を軽く開き、ベストのポケットに入ったガラスビンのアズフェルトが見せた。

「月の満ち欠けで症状に差が出るんだ。満月に近付くほど変化が起こりやすく、新月に近付くほど軽くなる」

「へえ、そんな違いがあるの？」

「新月には浄化の力があるんだ。だから呪いが抑制される。ここ数日は体が軽かった」

「じゃあ昨日のはなんだったわけ？」

「……だから油断したんだ。弱まってもなくなるわけじゃない。予防は必要だ」

「やっぱりあなた……抜けてるわよね」

悪かったって、とばつが悪そうに苦笑を見せたアズフェルトに少しほっとした時、

「わあ。あれ、すごいキレイ！」

色とりどりのガラスのアクセサリーが並ぶ露店が目に入り、シェイラは駆け寄った。

「ねえ、アズフェルトも見てみて……あれ？」

虹色に輝くブローチを手に後ろを振り返り、シェイラは首を傾げた。

そこにアズフェルトの姿はなかった。

再会

——いけない、はぐれた？

辺りを見回すがアズフェルトの姿はどこにもない。ついさっきまで一緒にいたのに——。

——うそ、どこ行つたの！？

人混みをかき分けながら一人一人、行き交う人の顔を確かめていく。はぐれたにしてもまだそんなに遠くは離れていないはず。見落とさないように気をつけながら進んでいると、

「おや、また会いましたね」

覚えのある声のような——と思った直後、目の前に羽つきのつづれた帽子を被つた若い男の顔がひょいっと現れた。

「こんにちは、お嬢さん。偶然ですね」

「え……っ、あ、あなた——きやつ！」

突然足を止めたせいで背後から来た買い物客にぶつかられ、シェイラはよろめいた。

「おっと、大丈夫ですか　ちょっとよけましょうか」

男に腕を引かれ、露店と露店のすき間へと避難する。改めてその顔を見上げ、シェイラは空色の瞳を睜った。

「あなた、この間大公の舞踏会で会つた——」

「はい、旅一座の座長、エルヴィスです。覚えていただきたき光栄です」

あの夜と同じ、しま模様のだぼだぼのサスペンダーつきズボンに

生成りのシャツを着た男・エルヴィスは、芝居じみたお辞儀をしてみせた。

「こんなところで何を……ってそれより、あなたに確かめたかったのよ。この間のあれは何！？ よくわからないこと言うし、急に消えるし——。もしかして本当は奇術師なの？」

大公屋敷の塔の上、出口は一つでシェイラはその近くにいた。でも振り返った時、エルヴィスの姿は忽然と消えていたのだ。

その後いろいろあったためすっかり忘れていたが、不思議で仕方なかったのだ。

「まあ、そんなところでしょうか。しがない身の上ですから、生きるためにいろいろと技は身につけてきましたので。たいていのことは何でも器用に出来ますよ」

帽子のつばを人差し指で弾き上げ、エルヴィスがにっこりと微笑む。顔の左半分は長い髪に隠されて見えないが、右半分を見る限りではその造作は案外整っている。それにあの夜は暗くてよく見えなかったが、肩にかかるばさばさの髪は金髪で、瞳の色はティティーリアと同じ空色だった。

「はぐらかすのね……いいわ、そういうのここへ来てから慣れてるから。ところでこんなところで何をしてるの？ あなたも観光？」

「まあ、そうですね。都に来るのは初めてなので。次の町に行く前に見ておこうと身内の者たちとやってきたんですが……どうやらはぐれてしまったようで。ちょうどお嬢さんをお見かけしたので思わず声をかけてしまいました。でも意外ですね、このような場所でお会いするとは。周囲を気になさっていたようでしたが、どなたかお探して？」

「あ……ええ、そうなの。私もはぐれちゃったみたいで」

シェイラは小さくため息をついた。「早く見つけないと大変だわ。あの侯爵様ったら本当に根っからのお坊ちゃま育ちだもの。変なやつにカモにされてないか……」

「侯爵様が、カモですか？」

「……あ」

しまった、お嬢様はこんな言葉使わない——慌てて口元を押さえると、エルヴィスが「ははあ」と顎をさすった。

「そういえば、あなたは“お嬢様のフリをしている”とおっしゃってましたね。あのパーティの時耳に挟んだのですが、大公様のご寵愛を一身に受けていらつしやる若き侯爵様が、たいそう美しいご令嬢とご婚約なされたとか……もしやあなたがそのお相手ですか？」

「え、ええ……まあね」

そうだ、この男にははうっかり本当のことを話してしまいかけたのだ。まさかまた会うなんて思っていないくて——。思い出してティーリアは後悔した。

「それはそれは、おめでとうございます。シンクレア侯爵様といえば、正義感に溢れる素晴らしいお方とどの夜会にお邪魔しても話題に上っておりますよ。お飾りと言われる騎士団も、彼の人気で持ち直しつつあるとか……。ですがそうなるかと確かに大変でしょうねえ、……公然と嘘をつき続けるのは」

ドキリとして、シェイラは思わずエルヴィスを見つめた。

「でも——偽ることに慣れると抜け出せなくなってしまうから気をつけて。本当のあなたを、自分を見失わないように」

金色の帳に半分隠された細面に静かな笑みを称え、エルヴィスがあの夜と同じように謎めいた言葉を投げかけてくる。

どうやら追及しようとは思っていないようだ。安心したが、気の滅入る指摘だった。

「そうね……嘘で自分を飾るって、思ったよりもきゆうくつで後ろめたいわ。でもこれは人助けみたいなものの。だからしばらくは頑張らなきゃ。本当はありのままの自分に戻りたくなるけど、それじゃあ受け入れられっこないし」

「そうですか？」エルヴィスが首を傾げた。

「ありのままのあなたを受け入れてくれる人は必ずいますよ。生まれや育った環境が違ってても」

「まさか」シェイラは肩をすくめた。

「本当の私なんて、上流階級の人たちに気に入られるはずないわ。あの人たちとは何もかも違うんだもの。だからお嬢様じゃない私は嘘をつくしかない」

そんなの山ほどある。動作、言葉遣い、食べるものや住む場所、何もかも庶民とは違う。必死で近づく努力をしたって決して同じにはなれない、雲の上の存在だ。

「そうですかねえ。まあ、嘘が真実になるということもありますからねえ」

「え？」

エルヴィスが読めない笑みを浮かべた。

「偽りも真実も紙一重。それが人を傷つけることもあれば、幸せに導くこともあるのです。だからその瞬間を見逃したらいけませんよ？」

口元で立てた骨ばった長い人差し指を、エルヴィスが振り子のように左右に揺らす。ふいに目が眩み、シェイラはぱちぱちと目を瞬いた。

「シェイラ！」

ぐいと肩を引かれて、シェイラははっと我に返った。振り返ると、アズフェルトの安堵したような顔があった。

「よかった、見つかった。こんなところで……何してるんだ？ 壁に向かって」

「え？ 壁？ 違うわ、今この人と——」

そうエルヴィスの方を指差して、シェイラは愕然とした。

そこには誰もいなかった。

ただ、ひび割れたレンガの壁があるだけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5769s/>

トワイライト・ガーデン

2011年11月7日03時21分発行